三つの扉

いき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三つの扉

【コード】

N0183Q

【作者名】

いき

【あらすじ】

現代日本が舞台のSF。

第一回 Sackomイベント・オムニバス（テーマ：「街」「扉」）
参加作品。

前編

闇を切り裂くヘッドライトが暗い路上に明るい楕円を描く。

照らされた路面は純白の光を反射させ、凍てつく夜を鮮やかに演出する。路上にうつすらと積雪しているのだ。直後に赤いテールランプが長い尾を曳いて流れていく。ヘッドライトもテールランプもひとつずつ。走り去っていくのは一台のバイクだ。

バイクのシルエットは中型クラスの大きさだが、聞く者に排気量を誤認させかねないほど重低音の効いたエキゾーストノートを轟かせて走り去っていく。一瞬、街灯の明かりの中を通過する。緑色でフルカウルの中型バイクだ。ライダーは黒い革ジャンを着ている。

再び闇に溶け込んだバイクは、テールランプの赤い残像を置き土産に彼方へ走り去った。

爆音の余韻が風に吹き散らされ、夜闇は静寂に沈む。

ささやかな街灯が照らす光の内側で、今にも止みそうな粉雪がちらちらと白く光っている。舞い散る雪片以外、動く物はない。

束の間の静寂が訪れる。しかし、長くは続かなかった。

微かな物音。少しずつ大きくなり、小刻みな振動音が静寂を駆逐する。

街灯が小刻みに揺れる。明かりは点滅し、やがて消えた。

突如、路面がせり上がった。

一拍の間を置き、轟音が炸裂する。物理的な圧力を伴うかのような音の奔流だ。

砕け散ったアスファルトは空高く舞い上がり、黒い雨と化してめくれた路面を目掛け降り注ぐ。

黒い雨の下で、闇が動いた。

闇よりも濃密な気配が街灯の消えた路上に蟠る。

「キシヤアアア」

ガラスを金属で引っ掻くような不快きわまりない奇声を発し、気

配の主が闇に蠢く。アスファルトの雨を避けようともせず。二本足で直立する影は、人か獣か。輪郭も定かでない闇の中、頭部目と思しき部分だけが紅く光っている。背丈は三メートルを優に超え、数は三つ……四つ、あるいはそれ以上。

巨人の影たちが一斉に動き出す。速い。重そうな足音が、あつという間に遠方へ遠ざかる。向かう先は、バイクが走り去った方向と一致していた。

間を置かず、新たな音が闇夜に響く。

立ちこめるアスファルトの粉塵が収まるのを待たず、遠方からエキゾーストノートが近づいて来たのだ。どんどん大きくなるそれは、先ほどのバイクの音量を明らかに上回っている。

やがて現れたのはバイク。エキゾーストノートの音量に相応しい大型バイクだ。ヘッドライトの強烈な光芒が、がたがたにめくれ上がったアスファルトを照らす。

大穴が開いた路面の手前でバイクを停止させたライダーが、眩きを漏らした。

「公道に大穴あけて知らんぷりとはいい度胸だ」

言い終えた途端、バイクのハンドル付近が赤く輝く。

パトライトだ。同時に、高いサイレン音が響き渡る。闇に浮かび上がるバイクのフロントカウル上部には白地に黒い“POLICE”の文字。交機の制服を着た白バイ警官の姿も露わになった。

急発進。盛り上がったアスファルトをジャンプ台にして白バイは宙を舞い、裂けた路面を飛び越える。

いつの間にか雪は止んでいる。走り去る一瞬、警官の口元は笑みの形にゆがめられていた。

* * *

N市N区は田舎というほどではないが、都会というにはどこか長閑な雰囲気漂う。それでもクリスマスが近いせい、街の中心部

はそこかしこでカラフルなイルミネーションが点滅していた。

緑色のフルカウルのバイクが徐行をし、とある路地へと入っている。黒い革ジャンのライダーはバイクを止め、ヘルメットを脱ぐ。

ぼさぼさ髪で、中性的な 目つきがやや鋭いものの線が細い

顔立ちの少年だ。少年は首にかけたペンダントを革ジャンの首元から手繰り寄せ、ペンダントに提げたものを掌に乗せた。アンティーク調の鍵を模った首飾りだ。しげしげと眺め、元に戻す。

バイクを降りた少年は前方に視線を固定し、眉をひそめた。

少年の視線の先には三人の男たちの背中が見える。揃いも揃って見るからにヤンキー系の黒毛ロングコートだ。

左右の男たちは痩せているが、真ん中の男は長身で肩幅が広い。

物理的な体格の比較だけでなく、存在感の大きさから見てモリダ―格は真ん中の男だろう。

背後から近付いてきたバイクのエンジン音が止まったことを訝るかのよう、右の男が振り向いた。その顔立ちから、彼自身も少年と呼ぶべき年齢好であることが見て取れる。革ジャンの少年がすでにバイクを降りているのを警戒したのか、彼は顔をくしゃくしゃに歪めて睨み付けた。どうやら、革ジャンの少年に向かって凄んで見せたつもりのようなが、残念ながら愛嬌のある表情となってしまう。おそらく、悪ぶった表情の作り方に慣れていないのだろう。それに対して革ジャンの少年は視線を合わせることなく、雪で濡れたバイクのシートをタオルで丁寧に拭き始めた。

他の二人の男たちもバイクのエンジン音に気付いているはずなのに、まるで注意を向けようとしなない。革ジャンの少年もまた男たちに無関心。右の男もようやく警戒心を解いたのか、バイクを拭き続ける少年に背を向けた。

真ん中の男が野太い声を発した。

「おいおい姉ちゃん、口は無いのか。こんな夜にひとりぼっちで寂しそつだから、俺たちが遊んでやるって言ってるのによ」

バイクを拭き終えた少年は立ち上がると、再び黒毛ロングコート

たちに視線を固定した。腕組みをし、溜息を吐く。

「黙ってねえで何とか言えよ。リュウの兄貴は楽しい遊びをいっぱい知ってるんだぜえ」

「怖くて声も出ねえのか。俺たちや別に命も金もとったりしないぜ」

左の男が声を出し、右の男も畳みかけるように言葉を吐く。この二人の声はやや高く、迫力がない。右の男は、さらに言葉を重ねた。「別に上の口なんてなくてもいいんだぜ。下の」

「お前は黙ってる」

即座に、かつ同時に他の二人が遮る。男たちが横を向いたことで隙間ができ、絡まれていた少女の顔が少年の視界に入った。路地裏のわずかな明かりの中にあってさえ、漆黒のストレートロングが艶やかに輝いている。

「あ、アキラ」

少女が小さな顔に満面の笑顔を湛えて手を振った。ハーフコートから覗くほっそりした足にロングブーツという出で立ちだ。白磁の素肌は神秘的に透き通っている。邪気のない笑顔と相俟って、明かりの乏しい路地裏を淡く照らすかのようだ。

「おい、あります。バイクだからスカートじゃなくてパンツにしろっつったろ。なんでなま脚なんだよ」

黒い革ジャンの少年　アキラが返事をした。同時に、三対の鋭い視線がアキラを捉える。そのただならぬ様子を意にも介さず、ありすと呼ばれた少女がのんびりと答える。

「見て。ショートパンツよ。あたし寒いのが平気なの」

ハーフコートをたくし上げるありすを見て、アキラは頭を抱えた。「あのなあ、あります。バイクってのは身体が剥き出しなんだから、ちよつとでも身体をガードする服を着てくれって意味なんだ。何も防寒だけが目的じゃ」

「勝手に話すすめてんじゃねえぞゴラア」

高めの声が二人の会話に割り込んだ。右の男だ。直後、鈍い音が響いたかと思うと右の男が後頭部を抱えてうずくまる。

「黙ってると言ったはずだぞ、シロ」

「痛い。なにするんすか、兄貴い」

シロの抗議に、左の男が答えた。

「紹介するぜ、シロ。こちらの方はな」

「そいつ新顔か、クロ」

左の男の言葉をアキラが遮った。その様子を見て口をぽかんとあけたシロは、うずくまった姿勢のままクロと呼ばれた男とアキラを交互に見比べた。

「そうっす、リーダー。昨日から俺らとつるんです」

「聞いている通りだ、シロ。いつまでもうずくまってんじゃねえ」

リュウに一喝され、シロはバネ仕掛けの人形よろしく立ち上がった。

「ど、どうもリーダー、はじめまして。俺、シロっす。よろしくっす」

アキラはそれには答えず、再び溜息を吐くとリュウを半目で睨み付けた。

「リュウ。お前いつからチンピラの真似事をするようになった」

「面目ない、アキラ。シロの奴が女を知らないって言うから。そこでナンパしようと思ったんだが、考えてみたら俺自身、女知らなくて。当然ナンパの仕方なんて」

「そこまで言ってからリュウは表情を硬直させた。」

「す、すまん、アキラ。あんたの知り合いだなんて知らなかったんだ」

がっしりした身体を小さくして謝るリュウに対し、アキラは無表情に応じた。

「ああ、そうかい」

さらに小さくなって頂垂れたリュウを眺めるアキラの目が、少し細められた。

「しかし、硬派のお前が新入りのためにナンパとはな。余程気に入ったのか、シロって奴のこと」

「まあな」

リュウの返事を聞いたシロは、後頭部を掻いて照れ笑いしている。「わざとじゃないのは判ったが、さっきのアレは脅迫だぜ。ありすは俺の女だ。たとえそうじゃなくても二度とするな」

「判ってる」

「いいよ、別に怖くなかったし」

ありすが大きめに声を出した。その鈴の鳴るような声に、アキラと向き合っていた三人の男たちが一斉に振り向いた。

「うふふ。“俺の女”か」

アキラはありすの言葉ではっとした表情になると、彼女の前へと歩いていき、頭を下げつつ言った。

「悪い。俺たち口が悪くてな。決してありすのこと、モノ扱いしてやるわけじゃねえ」

「いいの、判ってる。……嬉しいよ、アキラ」

その言葉に、リュウは瞼を半分閉じて口の両端を下げた。への字口のまま、「ごっそさんです」と小声で囁くように言った。

クロとシロの二人もリュウに続けて「いいなあ、リーダー」と口々に呟いた。瞳をキラキラさせながら。

「あたし、男の人に声かけてもらったの初めて。それも二日連続で。アキラもみんなも、一緒に遊ば」

ありすは男たちに屈託のない笑顔を振りまいた。

「リュウさん、クロさん、シロさんね。猫みたいで可愛い」

「すんませんでした、ありすさん。でも、俺たちだけ“さん”付けなんてよそよそしいっす。呼び捨てでお願いするっす」

「わかった。それなら、あたしのことも呼び捨てでお願いね」

「はっ、はいっ。……ありす」

につこりと笑うありすから目を逸らし、頬を染めてもじもじする二人の弟分たちを横目で睨んだリュウは、再びアキラへと振り向いた。左右非対称に片眉を吊り上げているのは、表情の選択を迷った結果だろうか。

「俺たちやペットかよ」

「俺もありすと知り合っただのは昨日なんだがな、こういう娘だから気に入ったのさ。みんなも、ありすのことよろしくな」

「……………」

場の全員が表情を緩める中、ただひとりクロだけが背筋を伸ばす。耳に手を当て、鋭い視線を路地の出口　表通りへと投げる。

「リーダー、兄貴。何か聞こえませんか」

「ああん？」

語尾を上げ、鷹揚に聞き返すリュウを、アキラは身振りで黙らせた。

遠方で響く規則的な音が路地裏に届く。

走る足音だ。しかし、人間にしては重い。しかも、金属的な余韻を響かせている。

近づく足音が大きくなり、刻むリズムは緩やかなテンポになった。歩いている。しかし、その金属的な残響はまるで

「ロボットお？」

シロが叫ぶ。その声は裏返っていた。

路地裏の出口からこちらを覗き込む一対の目。火を放つかのように赤く輝いている。

「骸骨　いや、鬼か」

クロが呟く。その姿勢は未知の敵に挑むかのように低く身構えていた。

赤い目の上　頭部と思しき部分には、天を突くかのような二本の突起がそそり立っている。

「わあ、おっきい」

ありすが歌うように言う。その両手はあごの前で組み合わせせていた。

表通りの街灯を背負う未知の存在は、逆光のせいでシルエットしかわからない。だが、光る目の位置が異常に高いことは明らかだ。

「冷静に感想述べてる場合か。光る赤目と角があって身の丈三メー

トル以上もあるような奴が実在するっただけで驚きだぜ。こんな奴とお友達になる趣味はねえ。逃げるぞ。タンデムに乗れ、ありす」

「いち早くバイクにまたがったアキラがありすを促す」

「でもあの子、あたしたちに用があるのかも」

「子？ こっちには用はねえ。ほら、行くぞ」

アキラが押しつけてきたヘルメットを、ありすはおとなしくかぶった。

「うん。まあ、知らない子だし、あたしの言葉も通じないし。あんまり友好的な感じがしないのよね」

「ごちゃごちゃ言っつてねえで早く乗れ」

ありすがアキラのタンデムにまたがるのと同時に、リュウが号令を出す。

「向こう側の抜け道から出るぞ しんがりは俺だ。アキラは女連れだから無茶できねえ。クロ、シロ。もしあの巨人が追っかけてくるようなら、お前らがフォローしろ。行くぞ」

四台のバイクが走り出す。

直後、強烈な閃光が全員の視界を灼く。

ありすが叫んだ。

「何する気？ まさか、地球人を巻き込むというの……、だめよ」

雷鳴。

長く轟く爆音は、ありすの声をかき消した。

「うわあっ」

瞬間的に真昼と化した路地裏で全員がバイクを停止させる中、ひとりだけハンドル操作を誤ったのが、シロのバイクが転倒した。シロはバイクから離れており、身体を縮めて丸くなっている。

両手で頭をかばっていたシロは、すぐに立ち上がった。どこも怪我をしていない様子だ。

「今のは落雷？ ……それよりシロ。お前こけ慣れてるな」

アキラは感心し、思わず感想を漏らす。

シロはバイクを起こした。無事にエンジンがかかる。

「みなさん、先に行ってください。俺のバイク無事つすから」

「キシャアアア」

ガラスを金属で引つ掻くような不快きわまりない奇声が路地裏に木霊した。巨人の雄叫び　ただ大きいだけではない、雷鳴とは異質の不気味さが、聞く者の心臓を鷲掴みする。

「うわ、う、うわああああ」

シロはバイクを反転させると、クラッチレバーを勢いよく放す。

「シロ、よせ。バイクごと化け物に潰されるのがオチだっ」

慌てて制止するクロに耳を貸さず、ウイリー　前輪を持ち上げた状態で巨人に突っ込んでいくシロ。パニックに陥っているのか、絶え間なく叫び続けている。

ありすはタンデムから飛び降り、巨人を正面に見据える。

「おい、ありす」

アキラの呼び掛けに応じず、胸の前で組んだ両手を正面へと伸ばす。

鈴の鳴る声。ありすの口から、涼やかに歌うような清楚かつ凜とした声が流れ出る。

「青の扉よ、誘え。我らの真の心を繋げ」

巨人とシロのバイクとの間に、淡い紺碧に輝く半透明の長方形が出現した。

長方形の向こう側、青い光を浴びた巨人が大きな口を開いているのが見える。同時に、シルエットでしかなかった巨人の全身が明らかになる。

異形。身長は三メートル半。鬼の骨格標本が命を得て動いているとしたら丁度こんな感じかと思わせる姿だ。剥き出しの頭蓋骨から直角が生えているかのような頭部。空洞のような眼窩の奥で、燃えるような赤い光が輝いている。肩、腕、胴体、足。骨のパーツひとつひとつが光沢を帯びており、金属的な質感を感じさせる。胸部から腹部にかけては肋骨や背骨を思わせるパーツが存在するもの。大きな隙間があいている。いくつかの骨パーツに絡みつくコード状

の物体は、機械的な部品というより剥き出しの血管や筋繊維といった有機物を思わせる、てらてらとした質感を備えていた。

何よりも異様なのは、臀部から垂れ下がる骨の集合体。星形のように、複数方向に突起を備えた骨が組み合わさり、長い尻尾を形成している。

SF映画に登場するロボットと言われれば、そう見えなくもないが、時折唸り声のような音を漏らし、呼吸するかのように肩を上下させてこちらを睥睨するその様子は、妙に有機的で獣そのものだ。「まさか」

異形の巨人の口のあたりに光の粒子が集まってくるのを目撃したアキラは、不吉な予感に目を見開いた。

さっきの雷は、こいつが？

バイクのシートから腰を浮かし、叫ぶ。

「伏せる、ありす」

このままではみんなやられる 焦燥に駆られたアキラがありすに飛びつこうと空中に身を躍らせたその瞬間、再び雷鳴が轟いた。

アキラが目をぎゅっと閉じたのと同時に、再び真昼と化す路地裏を、青い光が呑み込んでいった。

* * *

師走の市街地中心部。今夜のN市N区は、決して人通りが少なくはない。

大通りから外れた路地裏とは言え突然の爆発に人だかりができていた。

「くそつ、あの野郎。いきなり手を出しやがったのか」

白バイで急行する警官は、食いしばった歯の隙間から絞り出すような呟きを漏らした。爆発現場の路地裏からはかすかに煙がたなびいているが、どうやら火災に発展するほどではない。だが、既に誰かが通報したのか、消防車のサイレンが近付きつつある。

平和に慣れきった国民性に起因するものか、人々はこの程度の騒ぎをすぐにテロと結びつけて考える習慣がないため、あたりには人だかりができています。そのせいでなかなか爆発現場に近づけない。やむを得ず白バイを止めた途端、サラリーマン風の男が駆け寄ってきて空を指差した。

「お巡りさん、あれを。あいつがバイクを破壊」

「何だと。見たのか」

「い、いえ。実際に見たのは私ではないです」

夜空を仰ぐ警官の視界の中、虹色に光る巨体が不規則な軌跡を描く。時に静止し、時に急降下する動きは、鳥や飛行機などではない未知の何かであることを物語っている。

「あの様子、何かを探している？　じゃ、ガキは殺^やられたわけじゃないのか」

警官は獰猛な笑みを浮かべ、嬉しそうに呟く。

「あの、お巡りさん……。ひっ」

不安げに覗き込んでくる男に対し、警官は獰猛な笑みを浮かべたままの顔を向けた。男の語尾は、その表情に気圧された結果だ。

「それで、バイクに乗っていた人はどうなりましたか」

「……聞いた話ですみませんが、あの虹色の奴、誰も乗っていないバイクを壊して飛び上がったそうです。ところであいつ、虹色の奴いったい何なんでしょうか」

「情報感謝します。ここは危険です。直ちに、爆発現場から離れてください。それと、野次馬はご遠慮願います。なるべく虹色の飛行物体から離れるように」

警官は最後の質問には取り合わず、口調だけは丁寧に言って敬礼をしてみせる。

「え、えっ」

おろおろする男を無視し、警官は白バイを発車させた。口元のマイクに向かって怒鳴る。

「平野、高木。位置は掴んでいるな。奴を叩くぞ」

『待つてください、小隊長。まだ上からは攻撃命令出てませんよ』
通信の相手からあわてた感じの応答があった。若い女の声だ。

「黙れ、平野。命令なんざ待つてられっか。RGの奴は護衛対象を探してる。あのガキ、まだ生きてんだ。もうすぐ本物の警察も集まってくる。ガキの無事をのんびり確認してたら手遅れだ」

『小隊長』

「俺たちや軍隊であつて軍隊じゃねえ。現場判断が最優先だ」

『聞いてください。敵は五体、うち四体が護衛対象の追跡を始めています』

警官 いや、通信の内容からすると警官もどきか の顔から

笑みが消えた。

「あのガキ、爆発現場を脱出したつていつのか」

『現在、護衛対象は四号線を北上中です』

「何？ 反対側じゃねえか。あの路地、袋小路のはずだが。壁を飛び越えたとも言うのかっ」

『私に言っても知りませんよっ。位置情報送ります』

ほどなく、白バイのメーターパネルの二つに光点が表示される。

本物の交機の白バイには無いはずの装備だ。

「ばかな。M区だと。ここから七キロも離れているぞ。いったいいつの間につ」

その時、別のパネルが赤く光った。初老の男性の声が語りかけてくる。

『命令だ。所属と名前を』

「了解。EDF極東支部井上小隊、小隊長の井上です」

『よろしい。井上小隊、作戦コード・アルファを実行せよ。対A兵装の使用を許可する。最優先項目、護衛対象の確保』

「了解」

『優先項目、作戦終了時間。二四：〇〇時にいよんまるまるをもって、成否如何に拘わらず帰投せよ』

「了解」

『附随項目、R Gの殲滅もしくは駆逐』

「了解」

『通信終了』

小隊長 井上というのがこの警官もどきの名前であるようだ。

その顔に獰猛な笑みが戻った。

「聞いたか。全速で来い。護衛対象を追うぞ」

『了解。七分後に護衛対象に接触予定』

「先に行くぜ」

『小隊長。R G殲滅よりも護衛対象の保護が優先ですよ。くれぐれも』

「早く来い。もたもたしてたら俺ひとりで終わらすぞ」

井上はそれ以上返事をせず、ジャンプ台も使わずに白バイをジャンプさせた。飛び上がった白バイは、あるうことか空中に留まっている。

「一号機、変形」

空中で変形した白バイは、井上の身体を包んでいく。たちまち身長三メートルほどのパワードスーツと化した。

パワードスーツの背に装着されたランドセル型ブースターが点火され、白い機体が夜空に舞う。

直後、センサーの警報音が井上の鼓膜を叩く。

「ちっ、後ろか」

「キシヤアアア」

「嬉しいね、R G。この俺様を脅威と感じてくれたわけかい」

R Gとは虹色の巨人のことであろうか。それまで不規則に夜空を舞っていたはずのR Gが、井上の機体を追ってきたのだ。

「平野、高木。悪いがデートに誘われちゃった。お前らは真っ直ぐ護衛対象に向かってくれ」

『了解』

「さあて……」

井上は舌なめずりをすると、機体をエビぞりの姿勢で上昇させた。

夜空に大きく弧を描く機体の中、井上の視界は天地が逆転する。
「捉えた」

井上の頭上、街を背にしてR Gが直線的に迫ってくる。
井上は回転運動をやめ、機体を降下させる。両者の距離がぐんと縮まる。

両腕に装備された超小型ミサイルランチャーを選択。

照準 発射。

「おー、速いねえ」

射線上に、既にR Gの姿はない。物理法則を無視するかのよう、ほぼ直角に方向転換したのだ。

ミサイルはR Gを追尾し、軌道を変えて上昇していく。

彼我の上下が入れ替わる。

反転し、井上自らもR Gを追尾して上昇に切り替える。

逃げるR G、追うミサイル。ミサイルの方がわずかに速い。

着弾。炸裂。

夜空を染める爆炎が風に吹き散らされ、無傷のR Gが虹色の身体を光らせる。

「おっほ。頑丈だねえ。……うおっと」

上昇する井上に覆い被さるかのように急降下するR G。鼻先で縦回転し、井上は衝突を避けた。

再び上下が入れ替わり、井上は降下するR Gの背中を捉える。

両肩に装備されたプラズマ砲を選択。

照準 発射せず。

「まずい。上から撃つたら街を焼いちまう」

膝に格納された高周波ブレードを選択。

急降下しようとして、上体を仰け反らせた。

正面にR Gの頭部！ 手を伸ばせば届く距離だ。

「！」

舌打ちする間もあらばこそ。

井上が突き出す高周波ブレードを、R Gは自らの角で受け、首を

振った。

振動が停止したブレードは井上の機体の手を離れて弧を描き、闇夜に消える。

ゼロ距離は不利。ブースター最大出力。

「ぐああ！ くそっ」

背中に衝撃。RGの尻尾で打たれた。気付いた時にはブースターユニットが制御不能となっていた。

井上は、白煙を上げるブースターユニットを取り外し、捨てた。

自由落下を始める機体の中から、RGの威容を見上げる。

「けっ、悪かったよ。俺はあんたをなめてた」

「キシヤアアア」

まずい。こちらを見下ろすRGの口に、光の粒子が集まり始めている。

プラズマ砲を選択。

照準

雷鳴。

発射。

真昼の白光に包まれる中、井上のプラズマ砲は正確にRGの口の中へと吸い込まれていった。

次の瞬間。

真冬の夜空に、目映い太陽が出現した。

* * *

バイクで四号線を北上しつつ、アキラはつい数分前の出来事を思い返していた。

あたりを静寂が支配している。

アキラは閉じていた目を開いた。暗闇だ。

「ここは路地裏じゃねえ。どういうことだ」

街灯に照らされた看板を確認する。N市M区。四号線の道路脇だ。

「わけわかんねえ。……みんな、無事か」

近くで「おお」とか「はい」といった声が聞こえてくる。

「ごそごそと身体を起こす気配が伝わり、近付いてくる。リュウ、クロ、シロ。みんな無事だ。」

「あたしも無事。でも、ちょっと重いかも、アキラ」

立ち上がったアキラは、自分が押し倒した格好となっていた。ありすに手を差し伸べる。

「ありがと。ん、どうしたの」

ありすを立ち上がらせた後、アキラは彼女を物問いたげに見つめていた。

「ありす。お前いったい、何者だ」

ありすはにっこりと微笑んだ。淡い街灯に照らされた微笑みは、どこか寂しそうだつた。

「……アキラの女よ」

「真面目に答えてくれないか」

アキラの言葉にうつむいたありすは、数秒の間を置いて再びアキラを見つめた。笑みを消し、口を開いた。

「あたし、特別な。普通じゃない力を」

「いいじゃないすか、リーダー」

「シロ」

口を挟む仲間の肩を、クロが掴んだ。ところが、クロの肩をリュウが叩き、落ち着いた声で言った。

「言わせてやれ、クロ」

「俺、リーダーのこと、前から知ってたつす。それで、バイク乗りになりました。クロがリーダーの知り合いだつてわかつて、仲間に入れてもらったんす。ありすも、とつても魅力的つす。だから声をかけようとしたんす。ありすがリーダーの恋人なら俺も鼻が高いつす。あれ、何言つてんだ俺」

シロは助けを求めるようにリュウとクロを見比べた。

クロは口を開きかけたが、結局何も言わずにリュウを見た。リュウが静かに言う。

「お前の言う通りだ、シロ。シンプルに考えればいい。俺たちや化け物に襲われた。あの雷も、化け物の仕業だ。お前はアキラもありすも好きだ。だから、自分のバイクを潰してでも守りたかった。…だろ？」

「はいっす！」

シロは嬉しそうに声を張り上げた。そして、思案顔になって言葉を続ける。

「あれ、でも……。なんとなく守ってもらったのは俺たちのようなうわっぶ」

シロはそれ以上言葉を続けられなかった。ありすが抱きついてきたのだ。

「ありがと、シロ。バイクのこと、ごめんなさい」

「……なんでありますか。それより離れてくださいっす。もったいないっす。リーダーが見てますからっ」

焦るシロに歩み寄ったアキラは、彼の肩に手を置いた。

「いいよ、シロ。俺からも礼を言うぜ。ありがとな」

「あたし、アキラが好き。みんなも好き。……でも、あたしと一緒にいたら、きつとみんなに迷惑がかかる」

「あー、あのさ」

リュウが後頭部をかきつつ、ありすに話しかける。

「俺たち、その。やんちゃでさ。今まで、それなりに周りに迷惑かけてきてるんだ。だから、たまにはさ。俺たちの方がその迷惑って奴をさ。引き受けてもいいんじゃないかって。そう思ってるぜ」

「でも、あたし……。みんなには、あたしのことを」

「おっと。これ以上のんびりしてるヒマ、なさそうだぜ」

リュウは表情を引き締め、遠方を睨み付けている。

全員がその視線を追うと、虹色の輝きが路上を疾走している様子

が見て取れた。どうやら、こちらに近付きつつある。微かながら、金属的な足音がここまで届いてくる。その足音は、路地裏で聞いたものとよく似ていた。

「げっ。あいつら、一体だけじゃなさそうだ。とりあえず、逃げるせ」

「おう」

いずれ追いつかれるかも知れない。だが、余計なことを気にして化け物の到着をのんびりと待つなどという考えは、この場の誰も持ち合わせていない。

ありすはシロから離れ、アキラのタンデムにまたがった。

「シロ、乗れ。おいシロ、正気に戻れ」

「あ、ああ」

どこか夢心地といった表情のシロが、何度目かの呼び掛けでようやくクロのタンデムに座る。それを見届け、リュウが叫んだ。

「よし。しんがり俺だ。……行くぞ」

* * *

四号線上を疾走する二台の白バイ。

右側の警官がマイクに呼び掛けた。

「小隊長、平野です。RGを捕捉しました。現在追跡中」

二台の白バイは、井上小隊の隊員たちだ。

『了解。こちらは片付いた。悪いが、機体のトラブルで少し遅れる。RGとの接触は極力避け、護衛対象の安全を最優先しろ。なお、R

Gにはプラズマ砲以外』

「小隊長。井上小隊長」

通信が途絶えた。平野がいくら呼びかけても、井上は答えない。

替わりに、若い男の声が通信に割り込んできた。声の主は平野の左側を併走する偽警官だ。

『平野先輩、自分が追跡を続けます。先輩は小隊長を』

「すまない、高木。三分で戻るから」

二人の偽警官は余計なことを一切言わないが、小隊長機が抱える“トラブル”の詳細をほぼ正確に把握しているようだ。

「井上さんのバカ。ピンチの時くらい、私を頼ってよっ」

通信機をOFFにした平野は、そう一言つぶやくと、白バイごとジャンプした。

「二号機、変形」

平野は身長三メートルほどの白い巨人と化し、夜空に飛び上がった。

一方、落下を続ける井上は、徐々に迫る街の明かりに冷や汗を垂らしつつ、可能な限りの対策を講じていた。

両手両脚を広げて滑空し、機体八箇所のアフィールドスラスターを操作。しかし、三箇所のスラスターは噴射口が沈黙しており、期待したほど落下速度を殺せない。

RG撃破の際、ブースター破棄を余儀なくされた井上機は、迅速に戦闘空域を離脱する手段を持たなかった。爆発の影響を至近距離で受けるはめになったため、機体のあちこちに深刻なダメージを負ってしまったのだ。

スラスター五つと機体内部の緩衝材、もともと動作が不安定なGキャンセラー（重力低減装置）が現在の井上にとつての命綱だ。しかしこれらを総動員したところで、来たるべき地面への激突後、井上の身体は

「まず間違いなく潰れたトマト、か。まずいな。せめて一般人を道連れにするような真似は避けたいところだぜ……」

その時、視界の隅を白い巨人が過ぎった。

「？ あれは……、平野か」

一分とかわからず、平野機が井上に寄り添う位置にまで近付いてきた。

井上は、わざと切っておいた通信機のスイッチを入れる。

「ばかたれ。任務を放棄する奴があるかっ」

『お叱りなら後で。小隊長機を上から支えて、四号線に下ろします。今から九〇秒で高木機に追いつくためには、平均時速一六〇キロ必要です』

「……了解だ。頼む」

二機でひと組となった白い巨人は、路上目指して急降下していった。

「待ってるよ、クソガキ。余所者のRG共にやられるんじゃないぞ」
路面まで五メートル。

『投下します。ご準備を』

「やってくれ」

『三、二、一、ゼロ』

変形。井上機が白バイモードに戻る。

着地。タイヤのゴムが悲鳴を上げ、噴き上げた粉塵はヘッドライトの光条さえも束の間白濁させる。

フルスロットル。パトライトを点灯し、サイレンの音を響かせて井上のマシンは路上を滑っていった。

* * *

アキラは左右のバックミラーを頻繁に確認していた。虹色の輝きがどんどん大きくなってくる。もう間違いない。あの路地で襲い掛かってきた化け物とほぼ同じ姿をした巨人　RG　たちだ。

「くそっ、化け物め。いくら身の丈三メートルと言っても、二本足で走る奴がこれほど速いとは……。ん？」

バックミラーに新たな光が映った。見慣れた赤い輝きと共に、聞き慣れたサイレンの音がヘルメット越しに届く。

「白バイかよ。よせ、そいつらに近付くな」

アキラは思わず振り返って叫んだが、当然ながら肉声など届くはずもない。

再び前方に向き直り、ミラーを確認した途端、真っ白に反射する光がアキラの目を射る。

「　　」

響き渡る雷鳴。

幻惑されそうになるのをぎりぎり堪え、運転に集中。再び首を巡らし、仲間のバイクの安否を確認した。シロをタンデムに乗せたクロも、単独で走るリュウも無事だ。ひとまず息を吐いたアキラは、思わずといった風情で呟く。

「大したもんだぜ、あります」

これだけの騒ぎの中、必要以上にしがみつくでもなくタンデムでおとなしくしている少女。肝が据わっているのか、それとも単に脳天気なのか。

前を向いたアキラは音が立つほど歯を食いしばった。

信号交差点　赤だ。

距離、六〇メートル。ブレーキは論外。

ならば答えはひとつ。

「あります、しっかりつかまってるよっ」

アキラは、聞く者に喉が裂けるかと思わせるほどの大声を張り上げて警告した。

初めての信号無視。交差点まで三〇メートル。
四号線と交差する道路は静まりかえっている。

一〇メートル。

右側から光

「止まれええっ！」

クラッチを切って空ぶかしする。

交差点に進入してきたのは白い車。そのタイヤが甲高い悲鳴を上げる。

白い車のドライバーによるパニックブレーキ　どうやら、ABSを搭載していないか、ABS機能を意図的に使っていないようだが奏功し、四号線を半分も塞ぐことなく停止した。交差点の入口で、フロントフェンダーをアキラたちの進行方向側に向け、斜めになって止まっている。

アキラたちが交差点を駆け抜ける瞬間

「やめて！」

ありすの金切り声がアキラの耳に届く。

ほぼ同時に強烈な白光、そして雷鳴。

続けて爆発音が轟いた。

噴き上がる爆炎、背後から襲いかかる熱風にあキラの心臓は縮み上がった。

燃えているのは白い車だ。乗員の安否を気遣う余裕はアキラにはない。

さすがにしがみついていたありすの華奢な身体を背中に感じ、アキラは気の毒な白い車のことを考えずフルスロットルを維持することだけに意識を集中した。

「巻き込まれるなよ、リユウ、クロ」

叫ぶアキラの耳には、ありすの嗚咽混じりの呟きは届かない。

「なんてこと……。なんてことするのよ。地球人とあたしたち、絶

対に仲良くなれるのに……」

RGたちは相変わらず追いかけてくる。しかし、これまでの彼我の速度差を考えると、差の縮まり方が緩慢になったようだ。一見口ポットのように見えるRGたちにも、スタミナの限界があるのだろうか。

土煙を背景に、角と尻尾を備えたRGたちのデイテイルがいよいよはつきりと視認できるようになった。白バイの姿は見えない。「四体もいやがる。白バイまでやっちまうとは見境ねえな。もっとも、化け物どもには俺たちの常識なんて関係ないんだろうが」

アキラは苛立つ声で吐き捨てるように呟く。誰に話しかけるわけでもないその言葉はありすの耳に届き、彼女の表情に暗い翳を落とした。悲しげに目を伏せるありすに気付くことなく、アキラは独り言を続ける。

「ありすの言う通りなのか……。まさかあいつら、俺たちの誰かに用があるってのか。いや、最初に見た奴は俺たちに雷を浴びせやがった」
「そこまで呟いてから目を見開き、アキラはもう一度後方を振り返った。

車を炎上させるほどの威力なんだぞ。自分たち四人のうち、誰も怪我ひとつしていないのは何故だ。……本気で撃ったわけじゃなかったのか？ まさか、奴らは俺たちを生け捕りにでもするつもりなのか。

後方を睨むアキラは、何者かが土煙のカーテンを割り、こちらへ向けて矢のように疾走してくる様子を視界に捉えた。フルスロットルを続けるアキラたちのバイクに見る見る近付いてくる。

今度は何だ、とアキラが声に出すより早く、それまで消灯していた赤い回転灯の輝きと共にサイレンの音が響き渡った。

白バイ隊だ。三台いる。一列縦隊で、全く同じ軌跡をなぞり大胆なカーブを描く。大型バイクを限界まで傾斜させるライディングテクニックは、アキラの目から見て曲芸と形容できるほど見事なもの

だった。白バイ隊は何の躊躇ためらいもなくRGたちの真横をすり抜け、追いついてくる。

白バイ隊の動きに翻弄されるかのように、RGたちの隊列に乱れが生じた。そのせいか、RGたちの走行速度も若干落ちたようだ。あれよという間に白バイ隊は、アキラたちのバイク三台とRGたち四体との間に割り込んだ。

『よお、元気がクソガキども。この先に検問があるぜ。切符は切らねえから安心しな。ついでに脇道もおさえたから信号も気にするな。このまま全速で走れ』

アキラの耳に中年男性の声が聞こえてきた。特別製の拡声器でも使っているのだろうか。風とエンジン音、さらにヘルメットによる三重の遮音をもともしない、やけに明瞭な声だ。

『エイリアンどもは俺たちが食い止める。途中でコケるんじゃないぞ』

「エイリアンだと。エイリアンと言ったのか。あいつら、宇宙人なのかよ」

こちらの声は白バイ隊に届かない。そうと知りつつもアキラは怒鳴り返しつつ、スロットルを緩めない程度には運転に集中した。背中にしがみつくなりすは白バイ隊員の言葉に小さく息を吸い込むと表情を強張らせていたが、それに気付く余裕は今のアキラにはない。

「キシヤアアアッ」

RGの咆吼が轟いた。

背後からアキラたちの頭上へと、音もなく降り注ぐ光のシャワー。

「しまっ」

何らかの攻撃を受けたのか。なんとかして避けないと。

アキラは焦ったが、時既に遅し。

後方斜め上から仲間たちの声が聞こえてきた。普段、滅多なことでは慌てないリュウでさえ、悲鳴じみた大声を出している。

振り向いたアキラは目を疑った。リュウもクロもシロも、五メートルほどの高さに浮き上がり、静止している。これも化け物どもが

持つ力の一種なのか。

アキラは仲間の名前を叫んだが、その声は主を失った二台のバイクが転倒する音にかき消された。

「うわっ」

アキラの身体も宙に浮き始めた。ありすもだ。お互い、地面と平行に俯せの姿勢で浮き上がり、六メートル……七メートル、リュウたちが浮いている高さを越えてもまだ止まらない。アキラが空中で身を擦らせながら見上げると、彼より身体ひとつ高い位置にありすの身体が浮いている。

ここは水中。強烈な浮力に逆らえず、どんどん水面へと引つ張られている。そんな錯覚に苛まれる中、アキラの耳に澄んだ音色が届く。

「歌……。ありす？」

鈴の鳴る声。間違いなく、ありすの声だ。

「赤の扉よ、拓け。我らの剛の心を試せ」

こちらに伸ばされた、ありすの右手。頭を下げ、空中で逆立ちするような格好で精一杯伸ばしている。

掴むべく、アキラは左手を伸ばす。

互いの指先が触れた刹那

アキラの胸元が赤く輝いた。

様々な光が乱れ飛ぶ四号線を、猛火のごとき紅蓮に輝く赤色が呑み込んでいく。

光の源はアキラが胸に下げているペンダントだ。いつの間にか襟元から服の外へとはみ出したアンティーク調の鍵が光を発している。赤い光は四号線の路上に集束し、ひとつの形を成す。

やがて路上に、赤く光る扉が出現した。半透明に輝く大きな扉。その高さは七メートルほど。

アキラとありすの手が重なり、指と指を絡めてしっかりと握り合う。アキラが空いている右手でありすの腰を引き寄せると、上空七メートルほど上昇が止まった。お互いの足が下を向き、空中で直

立して抱き合う格好となった。

ふたりはお互いを見つめた後、赤い扉に視線を移した。彼らの目の高さは、ほぼ扉の上端あたりだ。

アキラの胸元で、鍵が一際強烈に輝いた。

次の瞬間、ふたりの身体は扉の中心へと吸い込まれていく。

異常事態の中、ほんの束の間……。アキラの意識は過去へと飛ぶ。

* * *

昨晚、街で見掛けた綺麗なロングの黒髪。アキラの好みの髪型はどちらかというところとショートなのだが、つい見とれた。もっとも、比較すればショートの髪型に魅力を感じる人が多いというだけで、ロングに魅力を感じないわけではない。

「綺麗な髪だね」

気付いたら声をかけていた。

少し驚いた顔で振り向いた少女は、アキラの目をまじまじと覗き込んだ。

見つめ合うこと数秒。

花が咲いた。彼女の顔はそうとしか表現しようのない、無防備で弾けるような笑顔に変わった。

ありすと名乗る少女に対し、アキラは眩しげに笑顔を返した。

彼らはいくつかの遣り取りの後、タンDEMツリーリングを約束するに到った。

「今日はスカートだからバイクは無理だ。明日はパンツにしてくれ」

元気よく「うん」と返事する少女の仕草が珍しくもあり眩しくもあって、アキラははにかんだ笑みを浮かべた。

「じゃ、お友達の証に」

やや古風で、それでいて幼い印象を伴う言い方だったが、ありすにはそれがよく似合う。彼女が差し出すペンダントを、アキラは即座に首につけた。

「普段アクセサリーなんて身につけないんだが、この鍵はなかなか良い感じだね。ありがとう、もらっとくよ」

ありすはそれには返事をせず、やや躊躇いがちに告げた。

「アキラ、あたしのこと助けてね」

「ん？」

「……いいえ、気が向いたらでいいの」

「俺にできることなら力になるぜ。力でもなんでも喜んで貸しちゃうよ」

アキラのおどけた言い方に対し、ありすはどこかぎこちない笑みを返した。

「ごめんね。純粋にアキラがあたしを選んでくれたのなら嬉しいんだけど、多分、鍵がアキラを選んじやったの。この先、何も起きなければそれでいいんだけど」

「よくわかんねえけど、楽しけりやなんでもオーケー。遊ぼうぜ」

「……うん」

この言葉を聞いたありすは、アキラに笑顔を向けた。最初の笑顔と違い、やや翳りのある表情。アキラはそれを“乙女の恥じらい”という程度に解釈する経験をしか、まだ積んではいなかった。

* * *

「キシヤアアアッ」

RGどもが吼えた。

四体中二体が路面を蹴り、ふたつの巨体が宙に浮く。

視線だけでそれを追うと、井上は号令した。

「VMAA全機変形」

『了解。VMAA二号機、平野。変形』

『三号機、高木。変形』

「二号機、三号機は空中のRGを追え。検問に近づけるな」

真後ろを追走していた二台の偽白バイ VMAAというのが正

式名称であるらしい　　がジャンプし、白い巨人に変身するや背のブースターを点火して飛び去っていく。

一方、井上は自身の一号機をジャンプさせて変形した後、背後を振り向く形にターンしつつ両脚を路面に着地させた。

「RGにはプラズマ砲以外通用しない。各自、引きつけて一撃必殺だ」

『了解』

背後から迫ってくるRGへ向け、井上は一号機を走らせた。

対面する格好となったRGが、井上機目掛けて両腕を突き出してくる。

あと三メートル。

RGの腕、その指先に備わる鋭利な爪が、井上機の鼻先へと迫る。二メートル。

井上は、いきなり機体を仰向けに倒し、両脚を先頭にして背を路面につけると勢いよく滑って行く。

そのままRGの股下をくぐる。

照準　発砲。

路面を滑りつつ、井上機の右肩から強烈な白光が迸った。

真っ白な光の柱が路上に屹立する　　RGの股から突き刺さって脳天へと抜ける串と化して。

一拍の間を置き、串刺しにされたRGを中心に四号線の路面ごと爆散する。

爆炎の渦は井上機をも巻き込んで荒れ狂った。

『小隊長』

平野の声は、呼び掛けというより悲鳴に近かった。

しかし、一秒と経たずに炎の渦を突き破り、井上機がスライディングの姿勢のまま滑り出てきた。

「悲鳴を上げるな、平野。それよりも、そっちの二体を検問に近づけるんじゃねえぞ」

大体こっちを見てる余裕がどこにある　　そう続けようとした言

葉のかわりに、井上は息を吐き出した。たちのぼる白い息が朱に染まる。

爆発の余韻が収まりきらぬ四号線が、強烈な赤い光に呑み込まれていく。

一体何が起きたのか　コンマ数秒の意識凍結。

それは、井上にとつて致命的な隙だ。

こちらを見下ろすもう一体のRG。

我に返った時には、完全に敵の間合い。

対処不能……、絶体絶命。

「くそ、しまっ」

「キシヤアアアアア」

寝ころんだままの井上機を踏みつぶさんと振り上げられたRGの足が、今まさに振り下ろされようとしている。

虹色に輝く巨大な足の裏が、井上の視界を覆い尽くした。

「っ」

二秒、三秒……。

何も起きない。

真っ黒だった井上の視界に、鮮烈な赤色が混じる。

「……手？」

RGの足の裏……。更にその倍はあるつかという巨大サイズの手がRGの足を掴んでいる。その手が赤く輝いているのだ。

井上の視界から手が遠ざかる。どうやら、RGの足を持ち上げているようだ。

RGの傍らに、巨大な炎の柱が出現している。

いや、炎ではない。赤色に輝く巨人だ。その外観はRGと違い、骸骨のお化けでもなければ角も尻尾もない。宇宙服を着たスリムな人間といった印象の巨人だ。その意味では人型に変形したVMAAに似ていると言える。だが、他の巨人たちと一線を画す違いは

「でけえ。七メートルはありやがるぜ」

「キシヤアアア」

「おいおい、迫力ねえな。まるで悲鳴じゃねえか」

R Gの咆吼に対して感想を述べつつ自らのV M A Aを操作した井上だったが、すぐに手を止めた。全く動かない。諦めて機体から這い出すのと、赤い巨人がR Gの脚をすくい上げるのが同時だった。あつさりと路上に倒れ込んだR Gは、地響きを立てて転がった。

「見た目に違わぬ馬鹿力だぜ」

呆然と呟く井上を見下ろし、赤い巨人が話しかけてきた。

『この虹色の連中をぶっ潰せばいいんだな。助太刀するぜ、お巡りさん』

V M A Aが備える外部スピーカーに匹敵する、明瞭な声。初めて聞く声ではあるが、井上にとって護衛対象にあたる少年の声だといふのは容易に想像がついた。思わず声に出して呟く。

「貴様……。緑のバイクに乗ってたガキか」

『ああ』

井上は片眉を吊り上げた。拡声器を使わずに呟いたというのに、こちらの声が聞こえているというのだろうか。井上は、赤い巨人の頭部を見上げながら名乗った。

「俺は井上だ。イノウエトシヒコ井上俊彦」

ナカマアキラ
『仲摩昶』

遅滞なく名乗り返してきた。やはり聞こえているようだ。

赤い巨人は井上に背を向けた。立ち上がるうともがいているR Gに注意を向け直したのだ。無造作に右足を振り上げ、そのまま振り下ろす。

爆発に等しい破裂音が轟く。井上は咄嗟に両腕で顔面をガードした。

ごく軽い衝撃音。小石程度の瓦礫がヘルメットを叩く音が、ほんの数回鼓膜に届いた。

ガードを解き、R Gが転がっていた路面を見ると、その身体は真つ二つになり、虹色の輝きも消え失せていた。

『上のお巡りさんたちは苦戦しているようだぜ』

赤い巨人は上空を見上げる仕草をした。つられるように井上も見上げると、VMAA二機とRG二体がジグザグに飛び回っている。時折細長い光の線が交錯し、雷鳴が轟く。

少し観察するだけでも、VMAAが防戦一方であることは誰の目にも明らかだ。常に背後に張り付かれ、攻撃の手数も明らかにRG側が上回っている。むしろ、VMAA側は攻撃に転じる余裕がないといった態だ。

予想通りの苦戦ぶりではあるが、井上は思わず舌打ちした。すぐ傍で、金属が軋むような重たげな音がする。井上は部下たちの戦況を観察するのを中断し、音のする方を見た。

赤い巨人が膝を折って両手を路面につけている。数秒ほどじっとしていたかと思うと、路面を蹴って夜空に飛び上がっていく。

「あの巨体で空も飛べるのかよ」

巨人を目で追おうとした井上は、巨人が手をついた路面に人が倒れていることに気づき、横目で一瞥した。リュウたち三人の少年だ。一番身体の大きい少年が起きあがり、他の二人を介抱している。三人とも無事。少なくとも意識があるようだ。

再び赤い巨人を目で追うと、すでにかかなりの高度まで上昇していた。

「たまげたね、こりゃ。正直、ここまで凄えとは思わなかったぜ。

……なるほど、ガキの保護に拘るわけだ、上の連中」

井上は通信機のスイッチを入れた。

「井上よりVMAA各機へ。作戦終了時刻だ。戦闘空域を離脱せよ。集合地点は偽装検問地点の支援車輛^{トレラー}。繰り返す……」

『しかし、RGが』

平野が寄越す返事を遮るように、井上は離脱の理由を告げる。

「援軍だ。赤いデカブツが向かってる」

『極東支部の新型ですか。敵は強力です。我々も連れ』

高木が返事をするが、そちらにも最後まで言わせず、井上は声を張り上げる。

「命令だ。いいから戻って来い。俺たちのVMAAでは足手まといだつてんだよ」

『……了解』

不満げな部下たちの返事を聞きつつも、赤い巨人を見送る井上の口元には歪んだ笑みが浮かんでいた。

* * *

飛んでいる。

夜も更けたというのに、アキラは昼さながら街の様子を一望できた。

ここは地方都市のベッドタウン、見下ろす景色は長閑なものだが、上空を疾走するような爽快感はアキラのテンションを高めていた。

実際に風を感じることもなく、髪がなびくこともないのは巨人の体内にいるからだろうと思いつつ、今なぜ巨人の体内にいるのか、なぜ昼間と同様に景色を見ることができなのか、そもそもなぜ空を飛べるのか、といった基本的な謎について考えるための脳の領域は麻痺してしまっている。

操縦桿を握っているような感覚はない。どちらかというと、柔らかなありすの手をずっと握っているかのようだ。だが、彼女の姿は見えない。試しに、アキラは呼び掛けてみた。

「いるのか、ありす」

「うん。一緒にいるよ」

「ありすには、俺の姿が見えるのか」

「いいえ。アキラが見ているのと同じ景色が見えるだけ」

「これはありすの力なのか」

「違うよ。あたしにできるのは扉を出すことだけ。それを開いたり閉じたりして利用できるのは、鍵を持つことが許された人だけなのだからこれはアキラの力」

アキラは掌を開き、そこに視線を落とす。眼下の街並みが後方

に流れていくのを背景に、赤く巨大な手が見える。どうやら、現在の彼の視覚は赤い巨人の視覚と一致しているらしい。

「俺はありすに力を貸すと言った。だから、決めてくれ。俺は何をすればいい」

「ごめんね。結局、面倒なことに巻き込んで」

「面倒？ いや、刺激があつていいと思うぜ」

「……うふふ。じゃ、お願い。あの子たち 虹色の子たちを、止めてあげて」

「わかった。手加減は？」

アキラは、半分麻痺した頭の片隅で、RGのことを“あの子”と呼ぶありすの素性に臆気ながら辿り着きつつあった。思わず口から“手加減”という単語が飛び出したのもそのせいだ。しかし、今はそのことに意識を集中している場合ではない。アキラの目の前で、二機のVMAAが徐々に窮地に陥りつつあった。

「いらぬ。全力で、お願い」

アキラは進行方向に目を向けた。

RGは予測のつかない軌跡を辿って空を飛び、雷を撃ちまくっている。対するVMAAは、肩に装備した砲塔を敵に向けようと悪戦苦闘しているが、相手の方が動きが速く、照準するに到らない。ほとんど一方的に、RGが撃ちまくる雷をVMAAが避けてばかりという構図となっている。

井上の仲間たちは戦闘行為を終了し、離脱しようとしている。だが、なかなか敵を振り切ることができない。戦いぶりを観察しながら、アキラはそのような印象を持った。

破裂音が轟く。

火元は一機のVMAAの左肩だ。砲塔が碎け飛び、白煙がたなびいている。

上空から、RGが急降下してきた。

鋭い角を向け、突進してくる。狙いは明らかだ 肩を損傷したVMAA。

V M A Aは、背のブースターを点火することなく空中を漂っている。パイロットは被弾の影響で一時的に意識が朦朧としているか、下手したら失神してしまっている可能性がある。

もう一方のV M A Aが、肩を損傷したV M A Aの上に覆い被さるかのように飛び込んだ。

「身を挺して守るつもりか」

だが、アキラの視界からは、V M A Aたちの後方 おそらく死角となる位置 に、別のR Gが静止しているのが見える。そいつの口の付近には、光の粒子が集まりつつあった。

雷撃を浴びせるつもりだ。万事休す。

「うおおおおお」

アキラの気合いに呼応するかのようになり、赤い巨人の身体から紅蓮の光が進行方向へと一直線に伸びる。

二体のR Gがこちらに注意を向けた。

赤い巨人は、紅蓮の光の中を滑っていく。

上空のR Gは軌道を変え、角を赤い巨人へ向けて新たに突進を開始。

V M A Aの後方にいたR Gは首の向きを変え、口を赤い巨人へ向けて雷撃準備。

すべての巨人たちが一点に集まってくる。

早いのは雷撃。

閃光。

視界が白一色に塗りつぶされ、激烈な轟音が荒れ狂う。

しかしアキラは露ほどの痛みも感じず、鼓動も乱れなかった。

視界が晴れた瞬間、真正面にR Gの角。

しかし、こちらの半分の体長しかないR Gは、間近で見ても何の威圧感もない。

アキラは無造作に赤い巨人の掌を押しつけた。

何かが潰れる音 アキラがこれまでに聞いた音の中では、タバ

コの箱が潰れる音（を大音量にしたもの）に近い が聞こえた。

次いで、何かが地面へ向かって落ちていくのが視界に入った。角が千切れ、身体が胴体の中央からへし折れてしまったRGが、虹色の輝きを消して落ちていく。わずか一撃で大破してしまったのだ。

最後に残った無傷のRGは、こちらに背を向け上昇し始めていた。アキラは追いかけてよとはせず、上昇中のRG目掛けて右腕を突き出した。

追うまでもない。確実に墜とせる。銃器でターゲットを撃ち抜くイメージ。初めて試す攻撃方法ではあるが、アキラには既に決まった事実に見えるほどの確信があった。

それを裏付けるかのように、赤い巨人の肘から拳にかけ、強烈な光が巻き付くかのように出現した。オレンジ色に輝くそれは、生きた蛇のようにターゲットを威嚇し、獲物に飛び付く機会を窺いつつ主人の命令を今や遅しと待っているかのようだ。

猛毒を持つ蛇を連想させる禍々しいオレンジの光。それは、直後にもたらされるであろう絶対の破壊を予感させる。

「これで終わりだ」

今まさに撃とう、とアキラが巨人の腕を突き出したその瞬間

(今はまだ撃つ時ではない。少年。ありす)

拡声器などではない。頭に直接響く声。鼓膜に届く肉声ではないが、声には明らかな“表情”があった。老婆に話しかけられている。アキラは確信に近い印象を持った。

(今夜のことは、こやつらの本意ではない。少なくとも、好きでやったことではないのだ)

「撃つな、というのか。確かに、逃げる奴の背中を撃つのは後味が悪いが」

アキラは巨人の右腕を下ろした。彼が攻撃の意志を引っ込めると、オレンジ色の光も消えた。

ありすの眩きが聞こえる。

「おばあちゃん。おばあちゃんなの？ 生きてたのね……」

(己が目で見極めよ。時期を待つて三枚目の扉を使え)

「三枚目の扉だと。ありす、お前には何のことかわかるのか」

「うっん、よくわからない。……教えて、おばあちゃん」

(その時、何らかの選択を強いられるだろう。だが、正解などここにもない。お前達が選ぶ道こそが正解だ。ただ、今はまだ選択の時ではない。時が満ちていないのだ)

間違いなく、アキラには日本語として老婆の言葉が伝わっている。だが、会話が噛み合わない。老婆が言いたいことは一体何なのか。

(時期は程なく訪れる。強く願え。そうすれば、三枚目の扉が現れよう)

「おばあちゃん、待つて。おばあちゃん」

ありすにとつては言葉の内容などどうでもいいようだ。少しずつ、頭の中に響く声が遠のいていく。もうすぐ、老婆の声は消えるだろう。彼女はこの場に老婆を留めようと躍起になっている。

(少年。肉体を喪った私には、もうありすを見守ることさえできぬ。時間もない。一方的な伝達ですまぬが、ありすのことをよろしく頼む)

「……………」

「……………おばあ……………ちゃん」

死者に話しかけられたとでもいうのか。

押し黙るアキラと涙声のありすが見守る中、どんどん上空へと昇っていくRG。アキラにとつては真昼のような視界の中、RGはやがて雲の向こうへと消えていった。

* * *

身体を不規則に揺らす振動が、眠りという名のカーテンを乱暴に引き千切る。一際大きく揺れ、彼は瞼を開いた。

「目が覚めたようね。あと一〇分ほどで基地に到着するわ。……気分はどう、仲摩くん」

落ち着いた女性の声で名を呼ばれた。事務的で冷たい声によって現実に引き戻される感覚は、あまり快適とは言えない。もっとも、夢さえ見ない泥のような眠りからの覚醒に、快適も不快もないのかもしれないが。

アキラは女性の声がした方に首を巡らす。誰かがいるということがぼんやりと認識できる程度だ。

少しずつ意識がはつきりとしてきた。不規則な振動とエンジン音。簡易ベッドに寝ているが、ここは車　トレーラー　の中だ。寝心地はお世辞にも良いとは言えない。室温は暖かいが、空気が悪い。換気されていないようだ。再び目を閉じ、一度頭を左右に振ってみる。

アキラは、半開きの目をベッド脇の女性に向け、観察する。明るい茶色のショートボブ。背は一七〇センチ前後。小顔で現代風の顔立ちだが、目付きは鋭い。二〇代半ばといったところか。雑誌のモデルと言われれば、アキラは疑わなかっただろう。ただ、今は地味なグレーのスウェットを着ている。そして、左腕を包帯で吊っている。

アキラの観察を真正面から受け止めながらも堂々としているその様は、特殊な環境に置かれてきたか、厳しい訓練を受けてきたか、あるいはその両方を経験した者であろうことを物語っている。

「その怪我。あんた、白い奴のパイロットだな」

「寝起きいいのね。まだ三時間しか眠っていないのに。若いってうらやましい」

「……………」

「はじめまして、あたしは平野美樹ヒラノミキ。もう少しで後輩と心中するところだったわ。あなたのお陰で命拾いできた。お礼を言っておくわね、ありがとう」

アキラは女性をまじまじと見た。

「俺の名は　、井上さんから聞いてるよな。ちょっと驚いたぜ。」

平野さん、必要なこと以外しゃべらないタイプかと思った」

「よく言われるわ。第一印象とギャップがあるって。これでも一応軍人なのよ。目付きが悪いのは我慢して」

ベッドの上に上半身を起こしたアキラはぎよっとした表情を隠さなかった。彼は健康診断用の検査着のようなものに着替えさせられていたのだ。その下は、パンツ一丁のみ。

「なんだこれは。俺に何しやがった」

「ごく簡単な健康状態のチェックよ。余計なことはしてないわ」

「……。ありすはどこだ。リュウたちは」

ありすは気絶するように眠っていたはずだ。それを思い出し、アキラは声のトーンと温度を下げた。

「恐い顔しないでよ。あたしたちは軍とは言っても正規軍としての扱いを受けてないの。いわばはぐれ者の外人部隊みたいなものね。

こちらとしても上層部の思惑よりも現場が大事。少なくとも、命の恩人の機嫌を損ねるようなことはしたくないわ」

受け応える平野の方は表情にも口調にも全く変化がない。

「ふん。どこまで本気で言ってるのか怪しいもんだぜ。それで、ありすたちはどうした。まさか、着替え」

「ごめんね、特別扱いはあなただけ。他の子たちは着てた服のまま、もっと簡単な健康チェックしか受けてもらってないわ。あっちのトレーラーでね」

アキラは硬い表情を崩さなかったが、平野にも聞こえるように小さく呟いた。

「リュウたちも一緒にいるのなら、まず心配ないか」

寝る前の記憶が曖昧だ。アキラは平野との会話を中断し、記憶を辿った。

およそ三時間前。

最後のRGの姿が見えなくなった後、アキラはVMAAを目で探した。一方の機体が悪戦苦闘しているようだが、健闘むなしくほとんどん高度を下げている。どうやら機体に不調を来しているのは、左

肩に被弾した方だけではないようだ。一見ただけでは判らないが、二機とも何らかのダメージを負っているのは間違いない。

アキラは赤い巨人を急降下させた。

「連中を助けるぞ、ありす」

「……………」

返事はない。構わず、全速で追った。程なく追いつき、折り重なる二機のVMAAを赤い巨人の両腕で抱え込んだ。

そのまま二機を四号線の検問まで連れて行ったアキラは、巨人から降りようと思った。そう思うだけで赤い巨人の姿は消え失せ、ありすを横抱きにした状態で路面に立っていた。腕の中のありすを見下ろすと、どうやら眠っているようだ。目尻がうつすらと濡れている。

「悪いな。ちよっと手持ちがなかったんで、お前らのバイクからバツテリーを失敬した。何に使ったかは聞かないでくれ」

背後からかけられた声に振り向くと、そこにはヘルメットを脱いだ井上が立っていた。髭面だが、若々しく精悍な顔立ちだ。アキラは彼の野太い声から中年を連想していたが、案外若いのかも知れない。

返事をしないアキラの様子を気にした風もなく、井上は言葉をかけ続ける。

「後で軍を通じて同じメーカーのバイクを弁償させるんで勘弁してくれや。ああ、お前の仲間たちは無傷だぜ。怪我つつつてもごく軽い打撲程度だ。念のため、俺らの支援車輛トレラーの中でチェックを受けてもらってる」

「軍？ まあ、俺もそうじゃないかとは思ってたけどな。警察が人型ロボットに変型する白バイを導入したなんて話は聞いたことないし。自衛隊……………でもないんだろ」

「もし警察が俺らと同様の装備を導入しても、市民には隠しておくだろうな。何せ、相手が相手だ」

「……………」

「俺が知ってることでよければ教えるぜ。とりあえず、トレーラーに乗ってくれ」

検問が設置されていた場所には、二台のトレーラーが停まっていた。片方のトレーラーから降りてきた偽警官たちは、手際よく二機のVMAAをトレーラーのコンテナ内に格納し始めていた。二機ともすでに白バイの形に戻っており、パイロットたちの姿はない。

「お前さんはこっちのトレーラーに乗ってくれ。すぐにここを離れる」

アキラはありすを抱きかかえつつ、自身を襲う疲労感や倦怠感と戦っていた。赤い巨人の視点を得て空を飛んでいた時の高揚感が消え失せた上、疲れと共にその反動が出たのか、もう何もしたくない気分だったのだ。

「井上さんよ、ひとつ頼みがあるんだが」

「なんだ」

「ちよつとでいい。寝させてくれ」

「おう。トレーラーの中に簡易ベッドを用意しておいた。気が済むまで寝な」

井上は白い歯を見せて笑った。

* * *

後編

「おう起きたか、アキラ」

カーテンが開き、井上が姿を見せた。彼はジーンズを穿き、ブルゾンを羽織った私服姿だ。傍らに、アキラの着ていた服が丁寧に折りたたまれている。革ジャンは壁際にハンガーで吊られ、揺れていた。

「慣れ慣れしいな、井上さんよ」

「まあそう言うな。クソガキと呼ばれるよりはいくらかマシだろ。」

ところでアキラ、そのペンダント、どこで手に入れた」

「どうだっていいだろ、そんなこと。路上販売で手に入れた安物さ」

「そんなにとんがるなよ。アキラとはこれから共闘する仲間なんだからな」

「は？ 話が見えない。何言ってるんだ、おっさん」

「単刀直入に言おう。アキラ、お前さんをスカウトしたい。俺たちはEDF。公的には存在を秘匿されているが、歴とした国際組織だ」

背筋を伸ばし、自衛官募集ポスター いや、着ている制服を考えると、警備員募集ポスターか のモデルもかくやという笑顔を向け、歯を光らせて告げる井上に対し、アキラは半目で睨み返した。

「おいおいおい。俺の自由意志は無視するのかよ。スカウトして言うより拉致だぞこれは」

「拉致とは心外な。その気があつたら拘束してるよ。我々は寢床を提供しただけだ。しかも、アキラの要求に従ってな」

「ふん、よく言うぜ。単車奪った上で寝てる間に車で三時間も移動しやがって」

「言つたら、存在を秘匿されているって。あの場に留まっているわけにもいかないし、まっすぐ目的地向かうわけにもいかないのが現在の我々の立場だ。三時間とは言え現場からびっくりするほど離れているわけじゃねえ」

そこで言葉を切った井上は、口元に歪んだ笑みを浮かべたまま、どこまで本気かわからない口調で告げた。

「判っていると思うが、俺たちは異星人と戦っている」^{エイリアン}

「へえ、あの虹色の奴ら、エイリアンなのか」

アキラは口角を上げたものの、その目に笑みの色はない。明らかに作り笑いだ。RGからの逃走中、アキラは既に井上の口から“エイリアン”という単語を聞いている。とぼけるのは無駄と判断したのか、アキラは作り笑いをやめた。

異星人だの異世界だのと、いい大人が大真面目に言えば言うほど非現実感が募る。だが、あんな化け物を地球上のどこかの国家ないし組織が兵器として開発したと考えるのは、それ以上に非現実的というのが、アキラの感想である。

「逃げるので精一杯だったが、奴ら、白い車を攻撃しやがった。あのままじゃ街がめちゃくちゃだ。逃げるしかないのかと思うと、口惜しかった。世界とか日本とか、逃げてる間は……、いや、今でも考えちゃいねえ。でかすぎてよくわかんねえからな。とにかくこの街だけは守りたいって思ったんだ。でも、どうやってかは知らないがやつらに身体を持ち上げられて、このままじゃやられると思って

ふと、アキラは自問した。身体を持ち上げられたあの瞬間、自分は何を考えていたんだろうか。街どころかリユウたち仲間のことさえ頭の中から飛んでいた。ただ、目の前のものだけ ありすだけを守りたい。そのための力が欲しい。

「 気付いたら赤い巨人の中にいた。たぶん、俺は巨人の体内に吸い込まれたんだろうな。けど、視界は巨人の目を通して外を見ているような感じだった」

アキラは、ありすが出現させた扉のことをわざと省略した。

「 試しにやってみたら、自分の身体を動かすのと同じように巨人の身体を操れるし、空まで飛べてハイになってた」

もしかして、夢でも見てたのか そう続けた言葉は、井上と平

野に二人がかりで否定された。

「アキラが身につけている鍵のペンダントだけだな、それ、ちよいと特別なものじゃねえのか？ 路上販売で手に入れたってのは嘘なんだろ。……おっと、睨むなよ。入手経路とか、今は追及するつもりはないぜ。肝心なのは、それをアキラが手に入れたってこと。科学班の設備で調べない限り断言はできんが、そいつは多分」

オーパーツ。鍵のペンダントを指し、井上はそう説明した。

大昔　とは限らないが　にエイリアンが地球に持ち込んだもの。現代の地球の科学では説明のつかない不思議な力を秘めていることが多く、かつ、オーパーツ自体が持ち主を選ぶことがあるとも言われている。

「それはともかく、どうやらR Gどもはお前さん本人というよりその鍵に用があつた可能性もあるんだな、これが」

「……………」
「あたしとしては、一般人の仲摩くんを巻き込むことになって申し訳ないと思ってる」

平野だ。アキラがペンダントの鍵を手に乗せ、それを見つめて黙り込んでいる間に、井上に対して目で断つた上で割り込んできた。

「でも、このまま仲摩くんを帰したとして、再びR Gに狙われずに済むという保証はない。R Gたちは、最初のうちは鍵のペンダントを持つあなたを捕獲するのが目的だったのかも知れない。でも奴らを撃破したことで、あなたが連中に敵として認識された可能性が高い」

「……………」
「今回、我々はR Gに負けた。でも、奴らの存在を探知する手段を持っている。あなたの協力があれば　。身勝手な言い分だけど、我々にはあなたの協力がどうしても必要なの」

ようやく鍵から手を離し、アキラは平野の目を正面に捉えた。

「協力って言われてもな。あの巨人がどこから来て、どうして自分が乗れたのか。それだけじゃねえ、どうしてあんな途方もない力を

使いこなせたのか。もう一回同じことをやれと言われてもできるかどうか。わかんねえことだらけなんだぜ」

「できるかどうか、か。それは今気にすることじゃねえな。なに、単純な話だ。可能性が〇パーセントならはじめからスカウトなんかしねえ。だがお前さんは一度巨人を操って見せた。たった一人で俺たちのVMAA三機を上回る力を使いこなして見せたんだ。たとえ、もう一度その力を使える可能性があった一パーセント、いや、コンマパーセントにさえ満たないとしても、その可能性に賭けたいと思うのが道理だろう」

シニカルな笑顔しか見せなかった井上が真面目な顔をしている。口角泡を飛ばすような熱弁ではないが、静かに諭すような口調の中に確固たる熱意を込めている。その変化に対し、しばしあつけにとられたアキラだったが、短い沈黙の後、面倒くさそうに告げた。

「俺は臆病なんだ。今回はたまたま赤い巨人に乗れたし、たまたま連中にも勝てた。だが次にあの化け物どもに襲われた時、またあの巨人が来てくれるとは限らねえ。確実に呼ぶ方法なんて知らねえんだからな。そんな状態でこの先ずっとエイリアンと戦い続けるんなら、お断りだね」

「もう遅いぜ。地球人側にとっての切り札はエイリアン側にとっての脅威だからな。さつき平野が言ったが、お前さんは連中に敵として認識された可能性が高いんだ。……できることならその役目、この俺に回して欲しかったんだがな。残念ながら誰でもいいって訳じゃないらしい。実に羨ましい話だぜ」

「何言ってるんだおっさん。こっちはいい迷惑だったの」「いいか、よく聞け。エイリアンにも二種類いる。我々地球人との共生を望む奴らと、やたら攻撃的な奴らだ。我々にとって重要なのは前者のエイリアンがこの地球に持ち込んだに違いないアイテム、つまりその鍵にアキラが選ばれたってことだ。何故かはわからんだが、な」

「何……?」

井上の言葉に、アキラは片眉を上げると視線を彷徨させた。あの時 アキラが声をかけた時、ありすは妙なことを言っていた。

多分、鍵がアキラを選んじやったの。

そしてもう一つ。

この先、何も起きなければそれでいいんだけど。

それは、何かが起きることを予見した言葉だったのだろうか。

「思い当たる節があるようだな」

「知るかよ！ 憶測で物を言ってるだけだろうがっ」

アキラは大声を張り上げ、次いで自分の声に驚いたように声のトーンを落として言葉を続けた。

「……何を訳知り顔で決めつけてやがるんだ、おっさん」

「ふん、まあいい。それより、念のために言っておくが俺はまだ二九だ。アキラと一回りも違わない」

「いやそれほぼ一回りだし」

彼らの会話に咳払いの音が割って入った。ふた組の視線が集まる先に、平野の姿があった。

「小隊長。基地到着まで一〇分を切っています。親交を深めるのは後回しにして、私から仲摩くんに概略を」

「これのどこが親交を」

「とりあえず黙って聞いてね、仲摩くん」

抗議の口を開いたアキラに、平野は静かな笑顔を向けた。しかし、実際に光を放つかのような彼女の視線に射竦められ、アキラは口を閉ざした。無言で苦笑する井上をよそに、平野は説明を始めた。

井上たちが所属する組織はE D Fの極東支部だ。有り体に言ってしまうえばエイリアンと戦うための国際的な組織、その日本支部である。E D Fに参加する各国の政府や軍の内部にスタッフが浸透しており、可能な限り活動の痕跡が残らないよう配慮されている。

地球には時期も定かでないほどの昔から、様々な星からやってきたエイリアンが住み着いていた。その中で、どのような理由からか

母星に帰ることができず、あるいはわざと帰らず、地球に居続けている者がいる。

しかしながら、EDFの目的はそういったエイリアン全てを抹殺することではない。

多くのエイリアンが地球人との混血を果たし、世代交代を繰り返してきた。地球人としての生を全うすることが望みなのであるうか、エイリアンの親たちは子どもたちに混血であることを知らせないのが普通だという。そもそも、生まれた星のことを何一つ知らず、寿命はもちろん身体構造も周囲の地球人と全く同じである以上、最早それらの混血をエイリアンと呼ぶのは難しい。

しかし、住み着いたエイリアンの中には地球人との混血が不可能なほど異質な者や、頑なに混血を避けてきた者がいる。そういった“純血種”の中に地球人に対して攻撃的な者が多く含まれるという。その一つが、アキラたちを襲ったRGと呼ばれる虹色の巨人だ。もともと、RGは生物というよりは兵器というべきだろう。

それらの連中が地球人に危害を加えた時、あるいは地球人への明らかな敵対行動の兆しが見えた際にこれを排除、撃退するのがEDFの目的なのである。

「端折った説明で悪いけど、RGは自律行動できるロボットのよう
な兵器だそうよ。これまで我々極東支部が対戦してきた中で、最も
出現頻度の高い敵」

「ふうん。じゃ、何者かがそのRGとやらを使って、俺たち……と
いうか、俺を襲ったってのか」

アキラが質問を挟むと、井上が割り込んできた。

「そうかも知れんが、RGは自律型の兵器だからな。誰かの命令で
はなく勝手に起動した可能性もある」

「勝手に？」

アキラは戸惑う表情を浮かべた。再び彷徨う視線は何かを思い出
そうとするかのようだったが、途中で諦めたのか、井上に視線を合

わせた。渋面を作り、抗議するかのように言葉を吐く。

「勘弁してくれよ。じゃあ、偶然起動した兵器が、たまたま奇妙な力を手に入れた俺を狙っている」と

アキラは言葉を止めた。老婆の声を思い出したのだ。

（今夜のことは、こやつらの本意ではない。少なくとも、好きでやったことではないのだ）

それでは、RGたちに命令した奴がいるというのだろうか。

押し黙るアキラの顔をちらりと一瞥し、井上は芝居がかった身振りを加え、演説口調で言ってきた。

「チャンスじゃねえか。アキラの手に鍵があるんだ。地球人との共生を選んだ連中の先祖が、今我々が直面している事態を予見し、それに対処できるシステムを用意してくれていたんだと思うぜ。それを、アキラが自由に使えるんだ」

「ふざけんな。その事態とやらに対処するのはあんたらの仕事だ。

俺には関係ないね」

「だからよお、アキラ。そのシステムつてのが俺様を選んでくれれば何の問題もなかったわけよ。だが、何度も言うが選ばれたのはお前さんだ……。ここはひとつ、考えてみてくれねえか。RGみてえな危険物、仮にいま起動しなくても未来のいつかの時点で起動し、結局はこの街で暴れるに違いねえんだ。いま目の前に現れた敵はいま潰す。残念ながら俺たちでは力不足だったが、アキラにはそれができる」

「なんかもう決まったことのように話を進めるの、やめてくんないかな。押しつけられたところで“はい、そうですか”って引き受けられるわけねえだろ」

うんざりした口調と共に刺々しい視線を突き刺すアキラに対し、井上はまるで動じず陽気に応じた。

「そんなに心配すんなって。俺たちプロだから、力が足りねえ分は他の面でカバーするし、別部署の研究チームも日々パワーアップのための研究をしている。アキラ一人に頼ったりしねえ。だから、

「一緒にやるうぜ」

口元を笑みの形に歪めて眼光をぎらつかせる井上は、陽気な口調からは想像できないほどに、全身から闘気とも言つべきオーラを発散していた。

「あんなRGはけものを地球に持ち込んだエイリアンの先祖たちは、あたしたちのことを野蛮な種族と思つていたのでしょね。実際そういう面があることは否定しないけれど」

対照的に平野は静かな口調で呟く。その自虐的な内容に対し、思わずといった態で訝る視線を彼女の顔に向けたアキラは、しかし何も言わなかった。なぜなら、平野もまたクールな表情の下に隠しきれない闘志の炎を燃やしていたからである。

「我々のVMAAは、これまでに交戦してきたエイリアンたちが使つていた技術をいくつか採用した結果、現在の地球の科学力を上回る性能を誇る戦闘マシンになった。それでも今回、歯が立たなかった。私たちは力が欲しい。そして、その力はいま目の前にある」

ほとんど睨むような目で平野に見据えられたアキラは、それでもなお返すべき言葉を探した。ここで自分がうかつにEDFへの協力を約束してしまえば、リュウたちともかくありすを巻き込むことになる。その思いが、アキラの抵抗に気力を与えていた。しかし平野の眼力を押し返すに足る言葉を知らず、口を開くことができない。

「君が力を手に入れた。そうである以上、君の気持ち次第で自由に使いこなせるはずよ。我々が望んでも与えてもらえなかった力を」

「のっ……」

望んで得た力ではない。アキラは大声で言い返そうとして口を開いた。しかし、意味のある言葉を紡ぐことができなかった。

「!？」

頭上にベッドが見える。

水中を漂うかのような、非現実的な浮遊感。

一拍おいて、衝撃音が耳に届く。

何が何にぶつかつたのか考える間もなく、鼓膜が裂けんばかりの甲高い音。

ああ、さっきも聞いたな、これに似た音。何だっけ？ 確か白い車の……。

非現実感からなかなか抜け出せずにいたアキラの脳裏に、急ブレーキの文字が浮かぶ。

そして。

冷たい空気が身を震わせる。頭を打つたが、せいぜい小さなこぶが出来た程度だろう。混乱し、何が起きたのかすぐに把握できないが、気絶していたわけではない。しっかり目を開き、周囲を探る。暗い。トレーラーのコンテナ内を照らしていた室内灯が消えている。

「ぐっ」

アキラはひとつ呻き、身体をもぞもぞと動かした。複数の打ち身ができているらしく、身体のおちこちに痛みがある。だが、動くのに苦痛を伴うほどではない。

何か、柔らかいものの上に乗っているようだ。起きあがろうと床についた手が、ぬるっと滑る。

ぞくりと身を震わせた。鉄の、臭い……。

自分の下敷きになっていた場所に目を遣ると、

「お、おい。平野さん！」

「……うるさいわね、仲摩くん。人の……耳許で」

すぐに返事があったが、平野の様子がおかしい。いまひとつ呂律が回っていない。

「なかなか頑丈じゃねえか、アキラ。ここから降りるぞ。外は寒いから今すぐ服を着ろ」

井上が普段と変わらぬ平静な声で告げた。彼が投げて寄越す服を、アキラは急いで着た。

「悪いが、平野の足を持ってくれ。まずは簡易ベッドに乗せて、ベ

ツドごとコンテナから出るぞ」

平野の上半身を抱え起こした井上の言葉に、アキラは是非もなく従う。

「いち、に、さんっ」

ポチャツ。

確かに耳に届いた、液体が跳ねる音。音は一度きりだったが、耳の奥で余韻を引き、アキラの鼓動が早鐘を打つ。

平野が何事か呟いた。彼女の足首のあたりにいるアキラには、その内容を聞きとるには声が小さすぎた。

「うるせえ。怪我人は大人しくしてろ」

井上の言葉は、アキラの耳に届いた。口調はぞんざいだが、妙に優しい声だ。

コンテナの扉は開いていた。否、ひしゃげて後方の路面に落ちていた。

ベッドごと外に出る。街灯はないが、月明かりのせいか車内よりは明るい。ベッドを下ろしたアキラは、横たわる平野を見た途端、その場に立ち竦んだ。

「平野、さん」

スウェットの右肩がどす黒く変色している。

懐中電灯を取り出した井上は、手慣れた様子で平野の怪我を確認し、

「肩だけで済んだか」

右肩を照らす。

「うっ」

鮮烈な赤色が目に飛び込み、アキラの思考が止まった。

「なんて……顔してんのよ。男……でしょ。こんなのかすり傷……よ。でも、両肩やつちやった……。今RGに来られた……。ら、戦えない……わね」

ついさっきまでアキラに強い視線を突き刺していた女性が、か細い声で、しかし気丈に微笑んでいる。アキラから見て、とてもかす

り傷と呼べるような怪我ではないはずだ。にもかかわらず、平野は強烈な意志を漲らせている。

「そういうことだ、アキラ。平野は俺が診る。お前はあっちのトレーラーだ」

「ありす！ リユウ！」

アキラは弾かれたように駆け出した。併走していたトレーラーも、同じように扉が壊れた状態で停まっていたのだ。

数歩走ると、それまでアキラが乗っていたトレーラーの影から出て、視界が開けた。その途端

「　　っ！」

勘を頼りに前方へ身を投げ出す。

革ジャンの袖を光が掠める様子を視界の端に捉えつつ、構わずに飛び込み前転の要領で一回転した。

立ち上がると、革ジャンの左肘付近が浅く裂けているのがわかった。肘を曲げて確認しようとして、

「　　っ　　っ　　っ　　」

鋭い痛みで顔をしかめた。どうやら出血しているらしい。

（ようやくリヤオナの呪縛から解放されたと思っただらこれだ。王族の血縁者としての立場を忘れ、地球人^{やほんじん}どもと混血をなすだけでも許し難い背信行為だというのに。このような取るに足らぬ少年ごときに我らの　　ガイアゴア　　を授けてしまうとはな）

頭上から降り注ぐ重々しい声。圧倒的な　　物理的な質量を伴うかのような声に、アキラは思わず耳を押さえたが、それは頭の中に直接響く声だった。

「リヤオナ？　　ガイアゴア　　？」

（ほう、私の声が聞こえるか。それも、単語が聞き取れるほどにはつきりと。ならば、貴様には高い純度で我が同族の血が流れているのだらう）

「何を言う。俺は地球人だ……」

立ち上がり、見上げたアキラは絶句した。紫の光が彼の目を射る。

赤い巨人と瓜二つ。身長七メートルの紫色に輝く巨人がこちらを見下ろし仁王立ちしていたのだ。

（この名は ルーナゴア。一応言っておくが、貴様が手に入れた ガイアゴア と我が ルーナゴア は対をなす存在だ。しかし ガイアゴア の力はこれの足下にも及ばん。大人しくしていることだ）

我知らず、アキラは奥歯を噛み締める。ぎり、と音がした。

（選ばせてやるぞ。その鍵を寄越せ。そうすれば、同族のよしみでリヤオナの娘と貴様を含め、地球人どもの一部くらいはペットとして飼ってやろう。 ガーディアン …… R Gと呼ぶ地球人もいるよ）
うだな。あれらは消耗品だ。先ほど四体破壊したことは不問に付す）
紫の巨人 ルーナゴア が右手を挙げた。

大地が鳴動し、視界が揺れる。

尻餅をつき、うつかり左手で体重を支えてしまったアキラは声にならない悲鳴を上げた。

轟音。

大地を割り、怪物が地中から這い出してくる。角と尻尾を持ち、身体を虹色に光らせた怪物 R G。その数、四、五……、合わせて六体。

二台のトレーラーを見下ろし、七メートルの巨人と三メートル半の怪物たちが取り囲む。

アキラは首だけを回してぐるりと見回し、唇を噛んだ。孤立。一方のトレーラーでは、井上が簡易ベッドをトレーラーに押しつけてつつ様子を窺っている。もう一方のトレーラーからは誰も降りてこない。

アキラは肘の痛みを無視し、革ジャンの上から鍵を握って呼吸を整えた。

「リヤオナの娘とは何だ？」

（リヤオナは我が母星における王族の血縁者。だから私は敬意を払い、気に入らぬやり方であっても最大限逆らわず協力してきた。だ

が奴は、母星に戻ることを早々に諦め、同胞どもに対して地球人との混血を奨励する始末。他の 我が同胞以外の異星人どもが地球人との混血を進めていくのは好きにすればいい。だが、こともあるうに我が誇り高い同胞に対し、野蛮な地球人との混血だなどと狂気の沙汰だ。ところが、あるうことかりヤオナの奴、私の諫言を聞き入れるどころか幽閉しおった)

声が途切れた。アキラが見上げる視線の先で、紫の巨人は夜空を仰ぎ、瞑想するようにじっとしていた。ほどなく、再び声が降ってくる。

(幽閉されている間もただ手をこまねいていたわけではない。何体かの ガーディアン はこっそり私の支配下におくことに成功したのでね。ほんの少しずつではあるが ガーディアン に改良を加え、リヤオナの動きを監視させることができた。そうしたらリヤオナの奴、一八年前に娘を産み落とし、地球人と同じやり方で子育てを始めたというではないか。ついに王族の血縁者自らが、地球人との混血を産み落としたというわけだ。この暴挙、なんとしても母星の王室に報告せねば)

「……興味ないね。くだらないおしゃべりしてんじゃねえよ。俺がためえに鍵を渡したとして、ありすと俺以外の地球人をどうする」
(貴様の仲間の地球人もくらは同じように飼ってやる。後の連中の処遇は決まっている 排除だ。この惑星は疲弊^{ほし}している。この恵まれた星に野蛮な地球人をこれ以上住まわせておくなど有り得ん)

アキラは、低い声で告げた。

「おい、さつきから聞いていれば好き勝手言いやがって。ふざけんな。ためえは自分たちが優れているから地球を有効に使ってやるってか。俺たち地球人が邪魔だから皆殺しにするってか。冗談じゃねえぞ。ここは俺たちの星。俺たちの街だ。後から押しかけてきた奴につべこべ言われる筋合いはねえ。盗人猛々しいんだよ」

(威勢が良いのは褒めてやるぞ、混血の少年。だが、その怪我で何

が出来る？ どのみち、たとえこの場に ガイアゴア を呼べたとしても私の敵ではないのだぞ)

アキラは服の上から鍵を握りしめたまま、二台のトレーラーを見る。潰れた運転席 ドライバーは絶望だろう。

「……渡すかよ。死んでも渡さねえ」

(ならば貴様もろともことごとく排除するまでだ)

巨人の身体から、ではなく、地面の下から紫の光が飛び出した。避ける間もない不意打ち。

光が右脚をかすめ、アキラは熱を感じて見下ろした。

「…………ぐ、ああっ」

太腿の外側が抉れ、鮮血が噴き出している。激痛に襲われたのは、その場に膝をついた後だった。

(うむ、遠隔攻撃の勘はまだ戻らぬな。退屈しのぎにじっくりといたぶってやるう)

ルーナゴア の右手の人差し指が光を纏い、その指先がアキラに向けられた。角度を変え、彼の左脚を狙う。

思わず目を閉じたアキラは、複数の駆け寄り寄る足音を聞いた。

目を開けると、何者かがアキラの視界を塞いでいた。彼に背を向けて手を広げ、壁を作る人影が三つ。

「リュウ、クロ！ ……ありますまで！ お前ら何してる、どけっ」

(邪魔だ、リヤオナの娘。それに、我が声も届かぬゴミども) 予備動作もなく、ルーナゴア の指先から光が迸った。

「くそっ、これまでかつ。…………！？」

反射的に閉じかけたアキラの視界に白い物が飛び込んだ。新たな闖入者は、三人の仲間たちの前にさらに壁を作る。

V M A Aだ。白い巨人もまたこちらに背を向け、両肩の砲塔をルーナゴア に向けている。

ルーナゴア から紫色の雷撃が迫る。

V M A Aの両肩が光る。

プラズマ砲の輝きだろう。しかし、後出しの不利は明らかだ。

今度こそ、全員まとめてオダブツか。

知覚だけ高速化されたかのようなスローモーションの世界の中、アキラは迫り来る紫の光を睨み付けた。

紫色をした破滅に包まれる絶望の中、アキラの頭に声が届く。

（高木だ。巻き込んですまなかった。せめて一度だけでも、君たちの楯となるう）

一秒の何分の一、何百分の一にも満たぬ時間の中、頭にはつきり届くVMAAパイロットの声。彼も混血 いや、自ら話しかけてきたということは“純血”なのだろうか。周囲の時間の経過から切り離されたかのような不思議な体験の中、アキラはたしかに高木と会話をした。

（おい何言ってるんだ！ 十分に訓練を積んだ戦いのプロが、俺たちみたいなガキ守って無駄に自滅するんじゃないやねえよ）

（俺の訓練はお前を活かすためにあった。そう思えば無駄なんかじゃない。この一撃だけは、なんとかしても防ぐ。一度防いだ程度で絶望的な状況は変わらんが、後はお前の手でこの状況をひっくり返せ。身勝手は承知だが、期待してるぞ）

VMAAの両肩を中心に、白い光が拡散していく。

まずい。ルーナゴアの雷撃が先に届き、プラズマ状態を維持するための力場が無効化されたのかもしれない。

しかし。

（なんだと。貴様、何をしたっ）

ルーナゴア から苛立つ気配を帯びた声が届く。

拡散した白い光は壁となり、VMAAの正面で紫の光とぶつかる。と、火花を散らして拮抗した。

（おのれ！ 加勢せよ、ガーディアン ども）

左右および背面に控えるRGたちが一歩ずつ近づき、虹色の輝きを一層強めた。

アキラたち目掛けて首を伸ばすと、六体の口の周囲が光を放つ。

「う、お……」

高木の肉声が漏れる。変わらぬ調子で雷撃を放ち続ける。ルーナゴア に対し、高木の機体は小刻みに振動し、飛び散る火花が爆発の恐怖を煽る。

「もう保たない。お前たち、この機体から離れるんだ」
高木が叫ぶ。

しかし、口を光らせたRGたちに囲まれている以上、逃げ場はない。

せめて目を閉じることなく。そう叫ぼうとした時、アキラの視界が金色に染まった。

(今度は何だ)

ルーナゴアの動揺がRGに伝わったかのように、取り囲むRGたちが周囲を見回している。

アキラの耳に、心地よい声が届いた。鈴の鳴る声。鼓膜を通して心に染み込む、可憐な声だ。

「選択の扉よ、金色に輝け。その鍵穴に、主の心を受け入れよ」
リュウたちより一歩遠くへ踏み出し、ありすが胸の前で両手を組んでいる。

彼女が両腕を天に伸ばすと、周囲を満たす金色の輝きが一層強まった。

(撃て)

雷鳴。

「あああうっ」

周囲が真昼と化す中、ありすは悲鳴をあげ、膝をついた。

アキラは痛む足を引き摺ってありすに近付き、叫ぶ。

「全員でありすを支えろ！」

叫びながら右腕を天に伸ばす。

リュウとクロは地面に膝をつき、アキラと一緒にそれぞれの右手をありすのそれに重ねた。

やがて周囲に満ちた金色の光は、彼らを中心に渦を巻き始める。

取り囲むRGたちは、二撃目を放つことなく一歩後退する。まる

で、気後れしたかのように。

(ええい役立たずがつ)

ルーナゴア は新たな雷撃をVMAAに突き刺した。

轟音。

噴き上がる爆炎を突き抜け、周囲にVMAAの破片が飛び散った。

「高木さ」

「つつたく、下っ端のくせにかっこつけやがって」

叫びかけたアキラの耳に、ふてぶてしい声が届く。

声の方を見ると、ブルゾンの埃を払いつつ男が立ち上がるところだった。井上だ。傍らに、警官の制服姿をした高木が横たわっている。

RGたちは攻撃してこない。それどころか、さらに一歩さがる。

爆炎がおさまると同時に、アキラたちを取り巻く金色の光は明確な形を成していた。

扉だ。金色に輝く巨大な扉。

ルーナゴア と向かい合うアキラたちは、その扉を背にして立つ格好となった。扉は強烈な光を放射させ、あたり一帯にさながら半球状のドームとも言つべき金色の閉鎖空間を作り出した。

アキラとありす、リュウとクロ。井上と高木。RG五体。……そして、ルーナゴア。それだけの者たちが、いまこの閉鎖空間の中にいる。

「何してる ガーディアン どもっ！ 俺の命令を聞けえっ！」

だいなんじょう大音声たいおんじょうが響き渡る。若い男の声だ。

声の源は。

全員の視線が ルーナゴア に集まる。

井上と高木以外の者は、その目を限界まで見開いて。

「その声……。お前……。シロ」

呆然と呟いたのはリュウ。その隣で、クロが握り拳を小刻みにふるわせている。

「そうさ。俺は“純血”だ。俺はうんざりしてたんだよ。地球人ど

もにも混血どもにも。そしてあります。お前にも、お前を生んだりヤオナにもな。ガイアゴアは我が誇り高き同胞の所有物だ。いくら適合率が高くて、混血なんかにはイイホイ渡すんじゃないやねえよ」

その言葉を聞き、立ち上がったありすの背がアキラの視界を覆う。口元を引き締めたありすはルーナゴアを決然と見据え、女王の演説もかくやという気品と共に宣言した。

「ガイアゴアは常に在るべき場所に在る」おばあちゃん、

いえ、母の言葉よ。意味を教えるはもらえなかったけれど、あの赤い巨人の名前だったのね。鍵は誰が渡したわけでもない、ガイアゴアがアキラを選んだのよ。ルーナゴアから降りて、シロ。そうでない、ガイアゴアはあなたを……。シロを、斃す」

数秒の沈黙。

「くはっ」

ルーナゴアから大きな笑い声が聞こえてきた。声は時折裏返り、噎せ返つてもなお笑い続ける。狂つたような哄笑は二〇秒以上続いた。

「混血の分際で、この俺を“斃す”ときたか。この恵まれた星に住む権利があるのは俺たち高等生命だ。間違つても、自分たちのことを知的生命だと勘違いしている地球人やほんじんなんかじゃねえ」

堪えきれない笑いと共に吐き出していたシロの声は、途中から低く唸るような調子に変わった。時折、しゃくり上げるような息遣いが混じる。

「地球人も混血も、俺たち“純血”と比べてやたら脆い身体と短い寿命しか無い癖に、とことん諦めが悪くて嫌になるぜ。だから、ガイアゴアを使って少しだけからかってやったんだ。たとえガイアゴアごときを使って悪あがきしたところで、お前らでは俺に敵わねえ。とつとと絶望しろ。絶望しちまえよっ」

クロが立ち上がった。ルーナゴアを正面に見ながら言う。

「シロ。お前、なに涙声で喚いてんだよ。俺たちの仲間になりたいんだろ、本当はよ。エイリアンだの地球人だの“純血”だの混血だ

のって、どうでもいいことにとらわれて変な意地張ってんじゃねえよ。そんなロボットからとっとと降りて、こっちに来い」
「うるせえ」

雷鳴。

ルーナゴア の頭部から、紫の稲妻がドーム天井へと伸びてゆく。

方向を変え、急降下する稲妻がクロに襲いかかる。

クロの身体を焼くかに見えた光条は、しかし地面に届くことはなかった。

アキラが見上げると、いつの間にか空中 彼らの頭上に浮かんでいた一体のRGが、その背で雷撃を受け止めていたのだ。

RGはふらふらと舞い降りると、アキラたちから離れた場所に着地し、そのまま俯せに倒れた。しばらくその背を白いスパークが這い踊り、消える。同時に、虹色の輝きも消え失せた。倒れたRGの周囲に残り五体のRGたちが集まっていく。

「お前らまで……、お前らまで俺の言うことを聞かねえのか。おのれ、皆殺しだっ」

闇よりも黒いオーラが ルーナゴア の全身からたちのぼり、紫に光っていた全身を黒く染め上げてゆく。オーラは炎のように揺らめいて、周囲の闇の密度を高めてゆく。

「ずっと独りだったんだ。今さら仲間だと、ふざけんな。野蛮人の分際でなにも上から目線でもの言ってるんだよ。思い上がりも甚だしいぜ。思い知れ、てめえらの無力さを」

ルーナゴア の中でぶつぶつと呟くシロの声が、質の悪い拡声器を通じたかのようにその場に響き、全員の耳に届く。

ありすはアキラを振り向いた。

「この金色の扉が、母が言った三枚目の扉。あの時はわからなかったけど、今ならわかる。アキラ、あなたが選んで」

怪我の痛みを歯を食いしばりつつ、アキラは立ち上がった。

「選択肢はふたつ。扉を閉ざし、その鍵であたしたちごとこの場所

を永遠に封印するのか。扉を開き、あたしたちと地球人、手を取り合って生きていくのか」

ありすの言葉に応えようとしたアキラだったが。
「混血どもが、勝手なことをっ」

シロが激昂し、地面が揺れた。

アキラたちを中心に、蜘蛛の巣状に地面が割れ、地中から紫色の光が漏れ出してくる。禍々しい紫の槍が意志を持ち、生きとし生けるものを串刺しにすべく哀れな獲物を探しているかのような光景だ。「終わりだ。地球人も混血も、みんな終わりだああ」

びじっ。

悪寒が背筋を這い登る。

やけに鮮明な音がアキラの耳に届いた。

布を裂く音だ。……いや、わかっている。裂けたものは、布などではない。

だからこそ、その音はアキラの背筋を泡立たせ、顔面に濃い陰影を落とす。

のろのろと振り向くアキラの視線の先で……。

呆然と立ちつくしているのは、井上。

「た……か、高木いいいい！」

彼が見下ろす先には肉塊がふたつ。

高木だ。彼の身体が、上半身と下半身に分かれてしまっていた。

信じられない量の血液が、地面と、井上の全身を赤く染め上げている。

血溜まりの中で痙攣している長いものは……。おそらく、内臓。リュウとクロは四つん這いになり、嘔吐した。

「はっは！ 脆い、脆いぞ地球人」

その瞬間、アキラは己のこめかみのあたりで何かが切れる音を聞いた。

赤い輝き。

アキラの胸元から放射される光が、紫の槍を駆逐する。

「いくぞ、ありす」

「はいっ」

突然せり上がった岩塊が足場を揺らし、ルーナゴアを翻弄する。

たまらず尻餅をついた黒い巨人を、赤い巨人が見下ろしていた。

「来たか、ガイアゴアめ」

いま、アキラは七メートルの高さから相手を見下ろしている。

静かに赤い右手を向けると、その腕に蛇のごときオレンジの光が巻き付いた。

「くらえ」

真っ直ぐに伸びるオレンジの蛇。

黒い巨人の腹に命中し。

しかし、突き刺さることはなかった。

「甘いっ」

起きあがりつつ、ルーナゴアは左手を振り上げる。

次の瞬間、ガイアゴアはその場に片膝をついた。

「くそ、右腕が……っ」

千切れ飛び、地面に落ちたのはガイアゴアの右腕。肩から先が、まるごと持って行かれた。

見上げると、立ち上がったルーナゴアが両腕を高く振りかぶっている。その手に握るのは長い得物。黒い剣。

「ガイアゴアは惜しいが、棺桶代わりにくれてやる。ただし、ズタズタに切り刻んだ上でな」

振り下ろされる黒い剣。

ガイアゴアは左腕を頭上にかざす。

轟音。

目を閉じて、衝撃を……。

しかし、アキラは何も感じなかった。

頭上で虹色の光が瞬いている。

「お前たちっ」

五体のRGたちが集まり、ガイアゴアの頭上に壁を作っていたのだ。

正面を見ると、再び尻餅をついた黒い巨人の姿が目に入った。

「血迷ったか、ガーディアン の分際で」

立ち上がり、手近なRGへと斬りかかる ルーナゴア 。

「そこまでだ」

その黒い刀身を、アキラは ガイアゴア の左手の掌で掴んだ。

動きの止まった ルーナゴア の腹をめがけ、ガイアゴア は右足を繰り出した。

赤い巨人の足に蹴り飛ばされ、自らの剣を手放した ルーナゴア は三度目の尻餅をつく。

アキラは左拳を強く握る。すると ガイアゴア の左手の中で、黒い剣は塵と消えた。

ガイアゴア を取り巻くようにRGたちが着地する。五体そろって、ルーナゴア と対面する格好で。

「調子に乗るな」

シロの怒号。

地面から紫の槍が突き出し、虹色の巨人たちが吹っ飛んだ。

「みんな！」

ありすが悲鳴を上げるが、RGたちの被害を確かめている余裕はない。

視界が傾ぐ。

ガイアゴア が横倒しとなり、身動きがとれない。

こちらに近づく ルーナゴア が、その手に何かをぶら下げている。

赤い足 ガイアゴア の右膝から下の部分だ。

いつの間にか、恐るべき握力で膝を引き千切られてしまっていた。

「手こずらせやがって」

シロはそう吐き捨て、赤い足を横に放り投げた。

「しっしっ」

腹に衝撃。

一度身体が浮き上がり、再び地面に倒れ込む。

「　　っ」
頭が万力で締め付けられるかのように痛む。

ルーナゴアに蹴り上げられ、踏みつけられているのだ。

「言っただけだ、力が段違いだと。混血のくせに　　ガイアゴアに
触れたこと、存分に後悔してから逃げ」

さらに蹴り上げられ、殴りつけられる。

口の中に鉄の味が広がり、視界が霞む。

「アキラ、アキラ！」

「すまん、ありす。……痛いよな」

アキラは、激しく首を振るありすの気配を感じた。

「違うの、アキラ！　今は、衝撃が全部アキラにつ。　鍵を頂戴。あ
たしと替わって！　もうアキラは限界よっ」

アキラは食いしばった歯の隙間から声を絞り出した。

「ふっ、ありすは痛くないんだな。それ聞いて……安心したぜ」
風を切る音が迫る。

ルーナゴアが、組んだ両手を振り下ろしてきた。

「うおおおおっ」

倒れたまま、ガイアゴアの左拳を突き上げる。

ガイアゴアにとっては圧倒的に不利な激突の瞬間　　。

閃光。

真っ白な光が、黒いオーラも赤い巨人も、そして金の扉をも塗り
つぶす。

白い光の中、RGたちが虹色の尾を曳いて空へと舞い上がる。

「お。これは一体　　」

リュウが。クロが。井上が。ありますが。アキラが。

それぞれ、RGの体内に吸い込まれていた。

五体のRGが一箇所に集まる。

次の瞬間。

「……………が、合体だと。貴様らごときゴミどもが……。なんでだよ」

一〇メートル。圧倒的な身長差で ルーナゴア を見下ろす巨大RGが、地面に屹立していた。

最後に、その身に ガイアゴア をも吸い込んで。

「ふざけるな」

シロが叫び、紫色の稲妻が巨大RGに突き刺さる。

RGはまるで意に介さず、左腕を無造作に振り下ろした。風切る轟音が訝する。

しかしRGの左腕は空振りに終わり、 ルーナゴア の巨体が空中に浮いていた。

意味不明の叫び声を張り上げるシロ。時折混じる、どうやって発音しているのかわからない奇妙な音声は、あるいは異星の言語だろうか。

おそらく、本^レ当にパニックを起こしたシロ。

「……………」

路地裏での一件がアキラの脳裏を過ぎる。バイクでRGに突っ込むシロの悲鳴。あれは演技だったのか。

「寂しいぜ、シロ」

巨大RGは、空中の ルーナゴア に右ストレートを叩き込んだ。
轟音。

虹色の輝きと共に、ドームの端まで弾け飛ぶ黒い巨人。その背がドームの壁面に激突し、金色のスパークが ルーナゴア の巨体を包む。

「くそ、この俺が。“純血”の俺がつ。おのれ。おのれおのれ」

まるで水中でうねる長い髪 ルーナゴア の黒いオーラが、RGへと伸びてくる。

RGの四肢と首筋に、オーラが巻き付いた。

「道連れだ、ガイアゴア」

「……………シロ」

RGの口から漏れたのは、リュウの声。
金色のスパークに包まれたまま、ルーナゴアの肩がぴくりと上下する。

「お前は誰も、道連れになど……、できん」

ぶっつ！

音を立ててオーラが千切れた。

音もなく飛び上がったRGは、両脚をルーナゴアに向けると、空中を光の速さで滑って行く。

紫電一閃。

赤。紫。橙。

様々な色の光が、ドーム内を駆け巡る。

荒れ狂う光と轟音の饗宴。

「……………シロ」

再びリュウがその名を呼んだとき、光はおさまり、ルーナゴアの黒い巨体は跡形もなく消え去っていた。

* * *

金色の扉を背に、両手を合わせていた井上が立ち上がる。

「高木。……ばかやろう。部下が先に逝くとは何事だ。貴様は殉職しても、二階級特進の荣誉なぞくれてやらん。ざまを見る」

「なんつー卑しい言葉だよ、井上のおっさん」

「ふん」

すかさずアキラが突っ込みを入れたが、井上は肩をすくめ、鼻を鳴らすだけだった。

アキラは井上から視線を外し、隣を見た。

そこには、さきほどから口を開いては閉じるといふ遠慮がちな動作を繰り返しているありすがいた。

「あ……」

視線を向けられ、ありすはおずおずと口を開いた。

「あたしは、アキラと一緒になら。このドームを封印しても構わな
」

ありすの言葉が終わらないうちに、アキラは彼女の肩を抱いた。

「答えなら初めから決まってるさ」

そう言って、周囲を見回す。

しゃがんでいたリユウとクロが立ち上がり、アキラを見た。

「俺たちはいつだって、アキラに従う」

「……………」

井上は背を向けたまま、何も言わない。

「よお、井上さん。俺の勘違いでなければ、あんたのところ、欠員
が出てるよな」

「……………ふん」

「俺たち、まとめて雇わねえか」

「よく言っぜ。俺が誘ったときは乗り気じゃなかった癖に」

「事情が違うだろ。それに井上さん、ドームの外で待ってる人がい
るだろが」

「ふっ、知った風なことを。…………そんなことより、ウチは給料安い
ぜ」

最後まで背を向けたまま、肩をすくめることで井上は会話を打ち
切った。

アキラは横を向き、ありすを見つめた。

「アキラ……………」

アキラは笑顔を向けるありすの頭に手を置いて、

「じゃあ行くっぜ、みんな」

金色の扉を振り向くと、しっかりと鍵を握りしめた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0183q/>

三つの扉

2011年7月28日03時33分発行